
友情の刹那

wokagura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友情の刹那

【Nコード】

N9922V

【作者名】

wokagura

【あらすじ】

もうすぐ大学のセンター試験。猛勉強する駿河聖奈。絶対に合格しなければならない。それにはもう一つの理由があった。友情の刹那、どうして異性との関係は変わってしまうのだろう？ずっと友達でいるはずだったのに何故か不思議な感情が湧き出てしまう。そんな高校生たちの切ない想いを描いた物語。

第1話 切っ掛け

妹の部屋のドアに手を掛けると、

「ぐおおお・・・」

といううめき声が聞こえた。逞真たくまは不思議に思いドアを開けた。
そこには妹・聖奈の背中があった。

「何という声を出しているんだ、お前は。」

軽く頭を叩くとビクッと振り向いた。

「うわっ、なんだ兄ちゃんか。バカになるから頭叩かないで。」

「もともと馬鹿だろう。」

「これ以上バカになりたくないの！受かんなかったらシャレにならないよ。」

「そうか、そろそろセンター試験だもんな。」

「そうなの。」

逞真は机のテキストを覗きこんだ。

「ところでどの教科をやっているんだ？」

「数学。」

逞真はじつと解答欄を見て、ニヤリと笑った。

「そこ、答えが違う。」

「…………マジィ？」

「ケアレスミスだ。見落とすな。」

「あ、ホントだ。流石数学教師。早いねえ」

そう、聖奈の兄・逞真は中学校の数学教師なのだ。

「お前、大丈夫か？受かる自信ある？」

聖奈はガッツポーズして逞真に振り向いた。

「安心せい！それに、どうしても大学に受かんないけんしね。じゃないとアイツに会えないし。」

逞真はふと思い出したように言った。

「アイツ・・・本当に聖奈の所に戻ってくるだろうか？」

「大丈夫、そういうの絶対守るやつだからね。来ないなら逆にこっちが行ってやるよ。」

「そうか。」

「元気かな、節ちゃん。」

「つたく、急に思い出してしまった。」

逞真は今度は妹の頭を撫でて部屋を後にした。

自室に戻ると、ベッドに寝転がった。

「本当、らしくない。聖奈が、将来の約束をするなんてな。・・・いや、そう思い込んでいただけか。」

逞真はその過去について思い出した。

第1話 切っ掛け（後書き）

初め・・・短くてスミマセン！！
いや、次から長くするつもりなんで、宜しく願いします☆

第2話 津田 節

約1年半前、聖奈が高校2年生の夏休みのことだった。逞真も部活がなく、家でパソコンに向かっていた。

その時、不意にインターホンが鳴った。

「はい。」

と、言った瞬間に逞真は凍りついた。さっきまでの暑さはどこへやら。

『・・・北高校のもの、ですけど・・・』

無愛想な声。逞真は一瞬にして反感を持った。

「少々お待ちください。」

そう言い捨てて受話器を置き、玄関の扉を開けた。

「・・・」

眉根を寄せてその男を見る。

髪は黒いはずなのに所々金色に染まっている。Yシャツは第・・・

3、4ボタンまで外れているしネクタイはほぐれている。中のTシャツは見せるためのもののように派手な色合いだった。よく見ると耳にはイヤリング。Yシャツの裾は中途半端にズボンから出ていて手首にはアクセサリと思うしきリストバンド。その手には聖奈のスクールバッグがあった。しかし、顔はモデルになれるんじゃないかと思うくらいイケてて、細身な体格をしていた。

逞真の前に姿を現したのは、見た目からしてモロ不良でいかにも態度の悪そうな男子高校生だった。

「・・・聖奈はいますか。忘れ物を届けに来ました。」

いきなりの呼び捨て。まずどんな関係なのかと逞真は訊きたかった。

「聖奈は留守だ。今学校にいる。」

男子高校生は呆れた顔をして

「なんだよ、まだ帰ってきてねえのかよ。アイツ、どんだけ遊んでんだよ。」

と呟いた。ますますこの男について知りたくなる。

「忘れ物を届けに来てくれたんだってな。それなら預か
「アレエ？節ちゃん!？」

元気のいい声がある。

「「聖奈・・・」」

息ぴったりで睨み合う二人。そこには聖奈がいた。

「節ちゃん、どしたん??なんでウチんち知ってんの!??」

「美和^{みわ}に聞いたんだよ。それよりお前、これ忘れてっただろ、俺ん家に。」

「あつ、そーだった!今日訊こうと思ったんだけど今日に限って節ちゃん学校に来てくれないんだもん。」

「わり。寝坊した。」

「だと思ったよ。美和も賢明^{たかあき}もそう思ってるから言い訳はしなくていいよ。」

「あっそう。ほらよ。」

「ありがとー♪」

「今日はなにしたんだ?」

「3人しかいないから、ジャマバスケットか。」

「ふーん。バスケットいなかった?」

「外でやったから!」

（「節ちゃん」・・・「俺ん家」・・・「バスケット」・・・）

逞真はそのやり取りにただ眉を顰めるばかりだ。

「とりあえずあがつてよ。暑かったから冷たいもんでも出す♪」
「ハア!??」

裏返った声を出したのは逞真。

「ほら、お兄さんも嫌みたいだし、遠慮しとくよ。」

「お兄さん」・・・

「あー、こやつのは気にせんどいて!この人教師のくせして人見知り激しくてさあー。」

逞真の肩をバシバシ叩く。

「教師……」

「そ。」

「北中学校数学教師・駿河逞真だ。」

教師という言葉に敏感に反応する男子高校生。

「ホント、やっぱいいわ。俺ねむてーから家帰って寝るし。」

「遠慮しないでって！ホレホレ」

聖奈は彼の腕をひぱって無理矢理中に引きずり込んだのであった。

「んじゃ、まず紹介するね。」

アイスティーの置いてあるリビングでニコニコしてるのは聖奈だけだった。

「こっち、さっきも言った通りうちの兄ちゃん。北中学校の数学教

師♪」

逞真は会釈すらず腕と脚を組んでただ男子高生を舐めるように見ていた。そんな様子に聖奈は咳払いして兄の腿を叩いた。思わず聖奈に振り向くとジロ……と睨んでおり、しぶしぶ逞真は腕と脚を組むのを止めた。

「んで、こっちは私の高校のお友達？2年A組の津田節君。ただせつ」

「ちーっす……」

やる気のない声。

「ほう、”友達”ねえ……」

「それで、あと美和、って前に家に来た女の子いたじゃん。その子とまとも高校のお友達の賢明君で仲良し組作って毎日校庭で遊んでるんだ。みんなクラスメイトなの。」

「フツ、そうか。彼だけが仲のいい友人、というわけではなくて安心したな。で？いつどういう関係で今ようになったのか、兄として教えてもらいたいものだが。」

逞真の言葉は嫌味たっぷりだった。節も負けずと嘲笑する。

「こっちこそ、なんでお兄さんと敢えて同居してんのか、友達として訊きてえんだけど。」

二人の間に火花は絶えない。

「ちよっとお……初対面でなに？ち、ちゃんと説明するから落ち着いて聞いてて。まず節ちゃんとの出会いから。」

それは……一年生の春だったね。まだ友達も少なくて中学も同

じだった美和といつも一緒にいたんだ。自転車通学になった、ある日のこと。ギシ・・・と自転車が鳴った途端、ペダルが進まなくなってしまったのよ。降りてみると、チェーンが外れた。

『美和あゝ、どうしょ・・・』

『そんなこと言われてもあたしこんなの詳しくないからな・・・』
『・・・どうしたの。』

その時、賢明がやってきた。まだその当時は親しくないしむしろクラスにいたような・・・って感じだったけど、賢明はボランティア精神があって誰にでも親切で優しいから、好奇心で近づいたんだと思う。

『チェーンが外れちゃって。』

『あー、よくあるよね。ちょっと見せて。』

賢明は私の自転車を触ったりいじったりして呟いた。

『複雑な作りだね。』

『あ、これお父さんがこだわって買ったやつなんだよね。ま、何年も経ってるけど。』

『俺にはちよつと無理だな。』

『いいいいいよ。手伝ってくれてありがと!』

『でもそれじゃあ駿河が押して帰ることになるじゃんか。女がそんな重労働することないよ。』

『うわ・・・ジエントル・・・』

『誰か近くに・・・あ。』

遠くに人影が見える。賢明は微笑んでその人に手を振った。

『おい！節！！ちょっと来てくれねーっ！？』

人影は無言で寄ってきた。

『……なんか用？』

第一印象がまず不良だったのね。無愛想だし、チャライし。正直私はドン引きしてたよ。

『チェーン外れたんだって。直してくれない？』

『……これ？誰の？』

『あ、私！』

『……あれ、アンタどこかで見たような……』

『おいおい、同じクラスの駿河じゃん。最初教室の前でズッコケて一躍有名になっただろ。』

『あー、あんときのアホな女？駿河ってんだ。いい名字だね。』

『ンぐ……』

私は悪口を言われて頬を膨らましたけど悪い気はしなかった。後味に褒めてくれるし、無愛想かと思ったら意外とフレンドリーだったから。

『なら見てやってもいいぜ。』

節ちゃんは口端を上げて私の自転車を見始めた。

『な、なんなの？？』

『こいつ、俺と同じ中学だったんだよ。技術的なことが凄く得意でさ。』

『へえ、ならなんで工業高校とかじゃなくて普通科の高校来たの？』

『それは・・・』
『馬鹿だから。』

自分からそう発した節ちゃん。でも妙に思った。ここのレベルって工業より結構上だった気が・・・。もしかして馬鹿ってそっちのバカじゃないのかも。

『・・・乗ってみて。』

あつという間に垂れ下がったチェーンは元通りだった。乗ってみると、ペダルが動く。

『ぎゃ、ありがと！助かった！！』

『あとそれ、空気入れ直したほうがいいよ。抜けてる。』

『わかった。』

節ちゃんは無言で立ち去ってった。

『気にしないでくれるか？アイツ、どこかひねくれてんだ。』

『うん。そんな気がしてた。』

『反抗期っぽいよね。』

『じゃ、気を付けて帰れな。』

『ありがとー！！』

そして私たちは賢明と別れた。これが、4人のすべてもの始まりだったわけ。

その日から、クラスで会うたび声を掛けあうようになって、すぐに仲良しになった。昼休み、昼食を食べる時、ふと美和が言った。

『ねえ、うちらもう仲いいんだし、名字で呼ぶのやめない？』
『確かに。』

『別にいいだろ、めんどくせえ。』

『はは、節ちゃんは賢明と違ってめんどくさがり屋なんだね。』

3人が沈黙した。

『・・・賢明はわかるけど・・・節ちゃん？』

『節ちゃんて、どうした？』

『俺、戦争アニメの女の子と同じあだ名かよ。』

『字は同じだけどな。』

『うるせえ！あっちは子がついてるだろ、子が！』

『節子wwww』

『ああん？なんだよ聖奈。指差すんじゃねえよ！』

『ほらーっ自分だって名前で呼んでんじゃん！』

『チッ、だったらもういい！名前で呼んでやるよ！！』

『』『ウーイ♪』『』

私たち3人はハイタッチした。

それから、よく校庭で遊ぶようになった。毎日、放課後。

そして、今みたいになってるわけ。・・・ど？兄ちゃんなら理解した？」

「・・・割と。」

「よかったー！」

逞真は再び節を睨み始めた。

「だが、本当にそれだけの仲なのか、怪しい気がするが・・・」

節は黙って逞真を見ながらニヤリと笑っていた。

これから、あんなことになるなんて知らずに・・・

第2話 津田 節（後書き）

次回もよろしくお願いします☆

第3話 苛立ちの上に輝くヒカリ（前書き）

聖奈視点です☆

第3話 苛立ちの上に輝くヒカリ

「まったく、苛つくなあ！」

八つ当たりするように節ちゃんはサッカーボールを蹴った。でも、賢明はそれを軽々と足で受け止めた。

「何がだよ。この短気。」

「短気じゃないし。」

「いや、絶対短気だよ。すぐ不機嫌になるし。」

「そーそー！ うちら何も悪いことしてないのに！」

私たち3人で責めまくると節ちゃんはすねたようにそっぽを向いた。

「あっそうかよ！」

「だからよ、何があったんだって訊いてるじゃん。」

「あっ、もしかして昨日のこと？」

「昨日？」

私のほうを向くのは賢明と美和。

「昨日って、節来なかったよな？」

「そうそう、どうせ寝坊でしょ。なのになんかあった訳？」

「私のスクールバッグ届けてくれた。」

私はそう言いながら賢明からのボールを受け取る。

「へー、気が利くじゃん。」

「そうだよ、俺めっちゃいいことしたんだからな！」

「じゃあなんで苛ついてんのサ。」

「あれでしょ？うちの兄ちゃんと気が合わなかったんだようせ。」

「どうせって言うな！ホントなんだよあの兄貴！」

美和にボールを蹴ると、呆れた表情を節ちゃんに見せてみた。

「まあ、うちの人変わってるのは認めるけどさ、初対面でそこまで言わんでよ。妹としてヘコむ。」

「聖奈の兄ちゃんってあの人でしょ？前に遊びに行ったときにあった人。」

「そうそう。」

「え、別にいいじゃん。真面目そうで、聖奈とは真逆だけど。」

「ぜんっぜん！俺は嫌いだね、ホント駄目だわああいう人。しかも教師だぜ？何言われるか堪ったもんじゃねーよ！！」

「まあまあ、落ち着けよ節。ただ会っただけなんだろう？大丈夫だって！」

賢明は面倒くさそうに言った。

「でもまた会うぜ？きっと。」

「もう、他のこと考えようよ。節そればかり。」

美和が節ちゃんにボールを受け渡した。

「あっそういえばさー」

節ちゃんが回転させるように蹴ったボールが空に上がった。

「今夜、花火しねえ？」

「いってきまゝす。」

玄関口でそういうと、兄ちゃんはそれなりに慌ててリビングのドアを開けてきた。

「待て聖奈。どこへ行く？」

「だから友達と花火だって。」

「・・・まだ明るいぞ。」

「いいよ、暇つぶしなら余るほどあるんだから。」

「友達と言うのはアイツとかか？昨日の・・・津田。」

「なにその言い方！何も悪いことしてないじゃん。節ちゃんは。」

「でも不良だろう、あの男。そんなやつと一緒にいただなんて見損なったぞ。」

「身なりとか態度とかはそりゃ悪いかもしれないけど、でもいい奴なんだよ。兄ちゃんにそれがわかるかっ！！」

兄ちゃんは壁に寄しかかり、馬鹿にしたような口調を始めた。

「それはわからないさ。俺はいつだってお前を監視してるわけではない。だがな、一つだけ言えるのはそれは仲がいいからだよね？それでああいう態度を取るのであればどっちみち同じことだと思うが？」

「最低・・・」

私はめいっぱい兄ちゃんを睨んで玄関のドアに手を添えた。すると兄ちゃんの手が私の腕を掴んだ。

「しつこーい！！」

「待て、これだけだ。いつ戻る？」

「わかんないって。でも結構遅くなると思う。」

「なら約束しろ。門限10時30分。一秒たりとも見逃さない。」

「ハ！？」

「それくらいは守れ。じゃないと変質者がナンパしに来るぞ。」

「別にいいし！一緒に遊んだら楽しいカモよ？？」

「馬鹿か！？」

兄ちゃんは本気のキレモードになった。

「そうして危ない方向に進んでいったらどうするんだよ！」

「冗談だってば。そんな怒らないでよ。」

「本当だな？」

「兄ちゃん、ホントしつこいって。」

兄ちゃんは溜息を吐いて腕を放した。

「気を付けて行ってこい。」

「はーい。」

少し反抗的な態度で私は家を出た。だって、過保護だよ。節ちゃん
の言ってることわかるかも・・・

「おっせーぞ聖奈！」

「ゴメン!!!」

河川敷にはもう3人は集まっていた。そうだよなー・・・ハハ。

「聖奈待ってたら暗くなっちゃったね。もう始めちゃう?」

「そうするかー。」

「あれ、私のせい?」

「当ったり前だろ!!」

「ゴメンチャイ?」

地面を見ると、たくさんの花火があった。

「これ全部用意したの?」

「2袋は美和の。妹がもらってきたんだと。」

「あとは俺と賢明で買ったんだぞ。その分はあとで何とかしろよな!」

「わかってますゼイ☆」

私は手をグッチョブさせた。

そんなこんなで小さな花火大会が開催された。

まずは手持ち花火。

そのままじゃつまらないから、ここは高校生風。ってかうちら風☆

何本もいろんな種類の花火を持って、一気に振り回す。これは毎回やってることだ。

節ちゃんなんて花火を股に挟んで「小便小僧」とか言いやがったよ。アホ！賢明は文字書いてるし。とにかく楽しい！

いつの間にセットしたのか、節ちゃんは打ち上げ花火に火をつけた。

それらはパンツと音を立てて空に舞った。そしてパアツとヒカリが輝いた。

「やっぱいいな。パアツとなってさ。モヤモヤしてたことなんて吹っ飛んじゃうし！」

「確かにー♪」

兄ちゃんのことなんてすっかり忘れていた。

でも、その楽しさは一瞬にして消えてしまった。気が付けば門限の時刻だった。

「あーっ！私帰んなきゃ！！」

「なんでー？まだこんな時間じゃん。」

「門限つけられたんだった。」

「まゝたあの兄貴？」

「いくらなんでも厳しすぎるだろう。もう子供じゃないんだしさ。」

「そうなのね！ああ、ホントヤバイ。んじゃね☆」

私は急いで自転車に跨った。

「聖奈ー！明日も来るよな！？」

「うんー！！ゼツタイ行くからー！！」

そう叫んで足早にペダルをこいだ。

急がなきゃ。あと5分もない。

そう思いながら帰ってくると、やっぱりアウトだった。兄ちゃんはドアごしで腕組みをしている。

「ねえ兄ちゃん開けてよ。」

「嫌だね。俺は言ったはずだ。3分7秒の遅刻だぞ。」

「そのくらい許したっていいじゃん！本当に入れてくれないの？」

「当たり前だ。自業自得。」

「なんで！？どうして友達と遊ぶことにそうやってケチつけるの？」

「ケチはつけていない。ただ約束事を守らないのが悪いんだ。」

「そんなに節ちゃんが気に入らないの！？でもだからって今まで許してたことをさ、厳しくするのはなんていうの・・・卑怯じゃない！？」

「・・・・・・・・」

沈黙がうまれた。兄ちゃん是否定はしない性格だけどこうやって逃げる。

「・・・・・・・・そうか。それならそこで大人しくしていなさい。」

兄ちゃんはそう吐き捨てて玄関から消えた。……信じられない。

私も頑固だよ。そこは兄ちゃんを同じ。だから粘ってここで待ち続けるさ。さて、どっちが勝つだろうね。

夏だから、寒いってことはない。でも、じっとしてるのは結構キツイことだった。

負けないよ、兄ちゃん。私は悪くないから。

何分経ったかわからない。その時、玄関の電気が点いた。

と思えばドアが開いた。

「・・・お前ってさ、頑固だよな。そこだけは俺と同じだ。だが、今回は俺の負けだ。」

私はフツと笑ってやった。

「早く中に入りなさい。そして風呂入れ。顔に煤がついている。」

・・・もしかしたら兄ちゃんは私を心配してたのかな？やっぱ、過保護だよ。でも、なんか嬉しい気もする・・・かな？

そのあと洗面所で顔を見ると、確かに顔は真っ黒だったりして（笑）

第3話 苛立ちの上に輝くヒカリ（後書き）

更新が遅れてしまい、すみませんでした＞―＜
次回もよろしくお願いします☆

第4話 高校生らしい

「おい、200円!ちゃんと取れよな!」

「200円って何さ!? 節ちゃんから頼んだくせに!!」

と、大声で叫び散らしながら話しても全然大丈夫。というのも、ここは街にあるゲームセンターなのだから。

節が聖奈のことを”200円”といっているのには理由があった。アホらしいことだが、節はUFOキャッチャーが大の苦手で、無理矢理聖奈に押し付けたのだった。

「まあ、いいじゃん。聖奈、こういうの得意でしょ?」

「美和あゝ、なんで君までそんなこと言うんだい?? ま、そーなんだけど・・・」

「ならいいじゃんか。やれば?」

聖奈は約3名に勧められ、しぶしぶ聖奈は2枚のコインを入れた。

「取れるかは保証しないからね!」

「へいへい。」

ボタンを動かし、ぬいぐるみのほうへ。

「何取ればいい？」

「あれあれ。カップのヤロー。俺、凄くハマってるんだよね。」

「・・・うちの従弟にもさ、カップとか妖怪好きな子がいるんだよね。全く意味不明なんだけど。」

そう言いながらも、聖奈はそのカップを掴む。

「うわ、聖奈って手つき上手いな。勉強以外のことは得意なんだろう。」

ニヤツと笑う賢明を聖奈はじと目で睨んだ。最後に持ち上げたボタンをポンと押すと、カップの下にある違うぬいぐるみまでとれた。

「あ、二つ取れちった☆」

「おお！！流石聖奈じゃん！！」

下から取り出すと、それはトラ模様の猫だった。

「ぎゃ、可愛いじゃん？なにこの感じ！キュンキュンしちゃううゝ！！」

思わず聖奈はそのトラ猫のぬいぐるみを抱き締めた。カップのぬいぐるみをとった節は少々呆れ顔で笑う。

「だったらそれ聖奈がもらっていいぜ。」

「え、マジ！？」

「だって俺これ欲しかったただけだし、取ってもらった恩だよ。」
「うわー！！ありがと、優しい男の子♪」

「さーて！次どこ行くー？」

「え、まだ行く感じ！？」

「今日はパーッと盛り上がる日だろ！？それともなにか？またあの生真面目兄貴に門限つけられてんの？」

「い、いやそうじゃないけど・・・」

聖奈は一度、ドアのほうを振り向いた。聖奈は学校の講習に行ったり、家に帰らないまま、街に来たのだった。少し、不安な気持ちを抱かれる。

（でも・・・ま、いっか。どうせかるーく心配するだけでしょうよ！）

再び無邪気な顔に戻った。

「ねえ、次カラオケ行こーよ！！」
「お、いいじゃん。」

「ギャオ〜！ギャオギャオギャオ〜！！へへい♪皆ー、盛り上がってるか〜い！？？」

爽やかな笑顔でマイクを握り締める聖奈、以外の同室しているメンバーは皆耳を塞いでいた。

「な、なあ、聖奈が歌ってる歌詞、全部”ギャオ”ってしか聞こえないの、俺だけか？」

「いや、俺もだ・・・」

「そんなこと言ったら、誰だってそう聞こえるし（汗）」

賢明は辛うじて美和に近づき、耳元で声を張った。

「聖奈ってさあ！」

「うん！？」

「合唱、こんなんじゃないかな？どこをどうすればこんな芸術的な歌い様になったんだ！？」

「あのねーっ、聖奈合唱とか真面目な状況になると、ちゃんと音取るの！でも、フリーのカラオケとかになると、ド音痴魂が発動されちゃって、こんな感じになっちゃうわけ！！」

「マジかよ!?!」

歌声に耐え続けていた勇者・節も、我慢の限界に達し、嘆いた。

「聖奈! いいから歌やめろ!」

「ふえ?」

「俺に貸せ!」

節は乱暴にマイクを奪い、自分の選択した歌に切り替える。

♪・・・?・・・

節の発する歌声は存外素晴らしかった。

「うわ・・・節って歌上手かったんだね。」

「俺も、初めて聞いたんだけど・・・ハンパなくね?」

「フンだっ! これくらい私だって歌えんのに。何で奪りやがったの訳!?!」

「いや・・・わかんないほうが可笑しいだろ・・・。」

「これでよかったんだよ、はい黙ろうかb」

「ブ・・・」

しかし、聖奈は悪い気はせず、むしろ楽しかった。

時計の差す時刻は、もう7時30分過ぎ。そんなこと、聖奈の今の心は知る由もなかった。

一方、逞真のほうはというと・・・

「ただいま。」

会議を終え、自宅に帰宅していた。

「・・・？何故室内が暗い。聖奈・・・？」

電気を点け、辺りを見渡す。

（靴もないし、いる気配はしないな。・・・まさか、まだ帰ってきていないのか？）

逞真の表情は段々渋みを増していく。

「大丈夫・・・だよな。高校で、何か頼まれごとでもあるんだろう。」

中学生でもこれくらいの時刻に帰ってきてもおかしくないんだ。なにを心配することがあるんだ、俺。」

自分に言い聞かせているところでもう逞真に冷静さは消えていた。必死に心を静めている。

（落ち着け……。聖奈はもうガキじゃない。）

重い溜息を吐き、鞆を置いた。

でも、いくら経っても聖奈は帰ってこない。もう8時は軽く過ぎているのに。

（本当に、大丈夫なのだろうか……。）

すると、外のほうで救急車の音が鳴り響く。

（まさか……。聖奈の身になにか起きていないよな……。？）

時計を見て、静かに首を振る。

（1時間待とう。）

「うわ、マジうめえんだけど!!」

「でしょー?? これ、私のおススメ商品だから♪」

コンビニの外で、4人は軽い夕食を食べていた。

節が食べてるのは聖奈が勧めた新商品・チョコストロベリーミックスまん。(マカロン風) 俗にいうスイーツ系のものだが、甘いものには目のない節にとっては幸せの塊。おやつに入らない食べ物だった。

聖奈はコッペパン。(アニメで出てきたトッピング仕立て)

美和は今ハマっている梅おにぎり。(コンビニによって味が違うらしい。)

賢明は意外と渋い、おでん。(これもコンビニによって味が違うらしい。)

「なんでだろ、こんな軽い食べもんなのにな、お腹満足するんだよ

ね。」

「それは、友達と食べてるからじゃない？」

「あ、それ言ってる。」

微笑みながら、それぞれ食べ物で頬張る。本当に幸せだった。

「ねえ、そろそろ帰ないとヤバくねえか？」

不意に賢明が呟いた。見ると、辺りは真っ暗だし、時計は9時をまわっている。聖奈もハツとした。一番浮かんだのは、兄の顔。そして考えられる台詞。

『どこに行ってたんだよ、この馬鹿。そんなに兄に心配させたいのか？ しかも俺が否定していたあの友達とこんな時間まで一緒にいたなんてな。何をしていた？・・・何にせよ、これからはこのようなことが起きないように、聖奈の行動を制限させてもらおうぞ。』

考えただけでゾツとした。

節は淡々とした目をしている。

「まだこんな時間じゃねーかよ。なに？ お前親うるせえ感じ？ 窮屈だな。」

「私んちも何も言われないよ。高校生なんだし自分で行動に責任持ちなさいって。」

「ああー・・・、俺も美和のようなんだが、流石にここまですると同居している奴くらい心配するだろうと思ってよ。」

「聖奈は？」

「え、わ、私？」

急に振られ、ただ戸惑っていた。

「私は・・・」

正直言われたことは一回もない。ただ、行動で示されたただけだ。門限つけられたり、冷酷な瞳を見せられたり。

「なんも言われてないやつ☆」

「そっか。あの兄貴でもこれくらいのことは許すんだな！」

節の顔が本当に嬉しそうで、聖奈は本当のことを言えなかった。

「じゃ、賢明は帰っていいぞ。兄弟だっているもんな。」

「ああ。わり！」

「じゃあね♪」

「また明日ー！」

「おう！！」

賢明は自転車を飛ばし、帰っていった。

「んじゃ、最後に寄りたいところがあるんだ。2人とも付き合ってくれねえ？」

「別にいいけど、どこ行くの？」

「いいから。」

ニコニコしている節の背後を、二人は不思議そうについていった。

ドンッ！

逞真は思わず机を叩いた。

「なんだ・・・？いつになれば帰ってくるんだよ・・・。こんなに遅くまで、一体何をしてるんだ？」

途端に、携帯電話が振動する。逞真は冷や汗を掻きながら、耳に傾けた。

「もし・・・もし」

「あ、駿河先生ですか？」

一気に緊張が抜ける。

「はい。そうですが？」

「1年3組の神路です！」

「おう、勝まさるか。どうした？」

「明日、参観日ですけど制服なんですか？ごめんなさい、親が訊け
つてうるさくて・・・」

「ああ、構わないよ。こちらこそ、不足していて済まなかったな。
・・・ジャージで結構だ。親子レクを行うからな。」

「わかりました！おやすみなさい！！」

「ああ。おやすみ。」

携帯をしまい、フツと溜息を吐く。

「・・・クソ・・・！」

舌打ちし、素早く家を出ていった。

（この馬鹿野郎。）

手当たり次第に駆けていく。

（もし何かあれば、俺は、俺は愚か者じゃないか・・・！妹一人守れ
ない、情けない男じゃないか・・・！！）

歯を喰いしぼるたびに、胸の鼓動が速くなっていった。

「ぎゃっ！」

聖奈の叫び声に誰もが振り返る。

「ど、どうしたんさ聖奈？」

「うわぁーん、痛いー！！！」

「はぁ？」

見ると、聖奈は床に落ちていたバナナの皮を踏んづけて転んでしまっていた。

「うわ、見事にこんな場所に落ちてたとは。多分、ポイ捨てかな？」

「逆にすごくね？バナナの皮で本当に転ぶんだ・・・。」
「結構痛いんですけどっ!!」

それもそのはず。右足からは出血。

「大丈夫？」

「おうよう。これくらいでくじけてどなんすんねん！」

「その気合ならこれから100m走走っても平気そうだな！」

「お、おうよう!!」

人気のいない、草原を抜けると、そこには大きな木が月夜に照らされていた。

「へえ、なにここ・・・綺麗・・・」

「だろ？俺が見つけた秘密基地。街からそんな遠くないのに、人ひとりと通らねー。」

「節ちゃん今までなんで教えてくんなかったの？」

「だって、こんだけ月夜が綺麗な日は少なかったんだ。お前ら親友には、とびっきりいいもん見せてやりたくてさ。」

美和と聖奈は顔を見合わせる。

「あーあ。賢明はもったいないねー。もう少しいればこれ見れたのに。」

「あ、大丈夫。あいつには一度ここ見せたことあるんだ。ま、昼間だったしこんな綺麗じゃなかったけどよ。」

「なんだ。なら、話し通じるね。ここ、私たち4人だけの秘密基地にしようよ！」

「そのつもりで私らここにつれてきたんでしょ?？」

節は苦笑した。

「ああつ。」

3人が微笑んだとき、聖奈はふと人影が見えた。

(ん・・・?)

よくみると、聖奈は顔を歪ませた。そちらもとつくに節たちに気づいていて、ただ睨んでいた。

「どうしたの？ 聖奈。」

「あ、私、もう帰るね！ 急に眠くなってきたてやばいわ。んじゃね☆」
「お、おい！」

聖奈は足早に草原を抜けて、例の人物のもとに走った。

「こんばんは、お兄さん。」

「こんばんは、聖奈さん。」

その冷ややかな言い方に、聖奈は頬を膨らませた。

「なんだよ・・・、言いたいことは大体わかってんだからね！ バンバン言ってくださいよう！ 覚悟はできてます。」

「何の話だ？ 俺はただここを立ち寄っただけなのだが？」
「へ？」

思わず彼の顔を見た。ズボンのポケットに手をつっ込んで不機嫌そうにしている20代の端整な顔の男は、正しく兄・逞真だった。

「立ち寄っただけ？待ってください、君は駿河逞真ですか？」

「君というな。当たり前だろう。他に誰に見えるんだよ。・・・俺も散歩にくらい行くさ。」

聖奈はますます反抗的な顔をした。

（ウソばっか。だって、自分で気づかないの？革靴は走り過ぎて磨り減ってるし汚れてるし、せつかくのスーツもシワだらけ。いつもならどんな日でも帰ってくれば私服に着替えてるのに、スーツってところがもうおかしいじゃん。それでも意地張ってるつもりなの？）

「ふーんそうなんだ。あ、さっきの場所、4人の秘密基地だから誰にも言わないでね。」

「フツ、高校生がこんなところでお遊びか。馬鹿で、ある意味高校生らしいよ。」

「なに、その嫌味ったらしい言い方。別に高校生が遊んでも違和感ないじゃない？」

「確かにそうかもしれないな。現代の奴らにすれば。」

語尾の言い方が、あまりにも冷酷で、なにか怒りが含まれているようだった。

「っ・・・とにかく帰ろうよ！私見つけたってことは帰る気まんまんなんですよーせ。」

「まだ散歩を続けてもよかったのだが、こんな暗がりだしな。複数のほうが安全だ。」

聖奈は、逞真が意地っ張りだと改めて思った。本当は自分のことを心配して探しに来たんだと知っていた。見え透いてる行為なのに、

逞真はそれが続けている。聖奈はなんとも言えない気持ちになった。

（どうして、怒らないのかな？いつもなら怒鳴るはずなのに。いや、兄ちゃんは声張り上げないか。睨みつけるんだ。でも今日は違う・・・。）

歩こうとすると、急に右足が痺れたように痛んで、聖奈は息を詰まらせた。

「・・・どうした？」

「別につ。」

なんとなく、今の逞真に甘えたくなくて、聖奈は何もない様に歩き始めた。

「・・・」

逞真は右足に勘付いて、スカートの裾のすぐ下に触れた。

「うわっ、変態!!」

「怪我したのか!？」

久々の逞真の荒げた声。思わず言葉に戸惑う聖奈。

「・・・そう、だけど？」

少し不器用な言い方になってしまう。

（ホラ、やっぱり心配になってきたんじゃないか。）

「痛くはないか？　というか・・・何があった？」

「何があったって・・・大袈裟だなあ。ただバナナの皮にズッコケただけだし！」

「バ、バナナ・・・？」

「ハッ・・・」

しまった、と聖奈は思った。ここでギャグを使うつもりはなかったのだが、つい口を滑らせてしまった。（っていうか、本当のことを言っただけだが。）

「なんだって？　バナナに足を滑らしただと？」

「だから何さっ！！　（恥）」

我慢が出来なくなった逞真はプツと笑った。

「お前、本当に馬鹿だなあ。」

「もういいじゃん！　はやく帰ろって！！」

そう、聖奈は逞真の背中を押した。

「はいはい。」

逞真も呆れたように歩き出した。

「講習が終わったのは約4時30分。5時間ほど遊んでいて、楽しかったか？」

「え？」

不意に逞真の言った言葉が真面目なことになって、聞き返してしまった。

「俺は、そこまで楽しいことなのか解らない。友人とそんなにいて疲れないのか、逆に関係が崩れることもあるんじゃないのかと考えてしまう。増してや、見た目が大人に対して反抗丸出しのようなやつと一緒にいて、自分も流されてしまうんじゃないかと思うことはないのだろうかと思うんだ。」

聖奈は初めて逞真の本音を聞いた気がした。

「・・・そんなことないとおもうなあ。私、とても楽しいもん。でも、兄ちゃんはきつとそう思わないんだろうね。」

「・・・」

「だって、私と兄ちゃんは違う人間だもん。」

その瞬間、逞真の表情が一瞬虚を衝かれたものとなった。

「兄ちゃんは真面目で、しかもプライド高いじゃん。だから、他人に惑わされたくないって思うんじゃない？でも私はそれが人を逆に信じていないように見えるんだ。やっぱり人ってそれぞれだよね。」

逞真は嘲笑を浮かべた。

「まさかそれを、妹に言われるとは・・・。」

しばらく空を見上げ、逞真は囁くように言った。

「お前が友達の大切さを選ぶというのであれば、俺は、なんでもかんでも入り込む必要性はないな。」

第4話 高校生らしい（後書き）

逞真はただの心配性だったんでしょね。
でも、聖奈の一言で変わりました！

次回も宜しくお願いします☆

第5話 青葉・砂浜・恋心? (前書き)

津田節視点です☆

第5話 青葉・砂浜・恋心？

昨日、夜遅くまで遊んだせいか、今日はやけに眠っちゃった。

気づけば時計は11時半だからな・・・（呆）やっぱ、ちゃんと睡眠時間はとるべきもんだ。うん。また賢明に説教されて、聖奈と美和に茶化されるんだろうな。ま、もう慣れたんだけど。

ふとケータイを見ると、メールが入っていた。賢明からだっ
た。

〈遅い！（笑）ま、寝坊だってことは言わんでもわかってる。それより、今日からの集場所はあの草原だってな。やっと二人に教え
たんだな。早く来いよ！——賢明〉

「ふんっ。」

思わず笑ってやった。言われんでもわかってるし！

俺は服を着替えて、階段を下りた。

「よおーっ！」

「あ、寝坊助節子がやっと来た！！」

「子、付けんなって何回言えばいいんだよっ！？」

笑いながら、3人のいる木陰に身を寄せる。

「あっちーのに、ここは涼しいよなあ。」

「節ちゃんも偶にはいいところ見つけるよね。」

「偶になってなんだよ！」

「でも、前みたいに高校のグラウンド使わないでいいから、楽だよホント。今日は何する？」

そう賢明が俺たちを見ると、聖奈が不意に言う。

「夏休みってさ、もうそろそろ終わっちゃうよね。」

「あー、あと何日だっけ？一週間切った？」

「うは、俺宿題ぜんっぜん終わってねえや！」

「だから言ってるじゃんかよ。初めのほうに終わらせとけて。」

俺と聖奈と美和はムツと賢明を睨んだ。

「そんな早くおわんの、賢明くらいだろうが！」「病院の跡取り息子と一緒にすんな！」「どうせ成績トップの奴とアタシらは違うん

だよー!!」

皆、言いたいことは同じみたいだ。同時に言われて、賢明は苦笑する。きつと何言われたかハッキリわかんないだろうな……。

「んでえ、話戻るけど、もう少ないじゃん。なのにさ、まだやり残したことになるなーって感じしない??」

「ん、確かに。なんかこのまま終わるのもったいねーよな。」

「来年受験だしさ。楽しめんの今だけじゃん! だから、やり切ろうよ!」

正論だと思うな、ホント。偶にはいいこと言う! ↑仕返した。

「じゃ、思いつくもん言ってこうぜ。」

「あ、私海行きたい!!」

「だよねだよね! 夏といえば海じゃん!!」

女子二人は勝手に盛り上がった。そんなにいいもんかあ? 海。

「えー、あっちーだろ?」

「それにここ内陸部だし遠いじゃん。川ならあるけど。」

「川で泳ぎたくないー!!」

「遠いけどいけない距離じゃないじゃん!! 同じ陸なんでもん。」

「そんなこと言ったらなんだってアリになるだろー……?」

2人の活き活きした顔を見詰め、俺と賢明は顔を見合わせた。

「きゃっほー！！ねえ、海が見えるよ！！」

「うわ、キレー！！」

案の定、海には行くこととなった次の日。なんでも・・・

『いやあ、ダメもとで親父に頼んだらさ、アッサリOKだったさ。
海の近くに別荘もってるからそこ使えって。』

『流石病院の跡取り息子っ！よろしくお願い！！』

みたいなことになったらしい。ナイスなのかKYだったのかわからんが、思い出されるんだったらいいか。恩に着るぜ、賢明☆

「ふと考えたんだけどさー、海の近くに住んでる人ってこれが当たり前だから、こんなに喜ばないんじゃないかねえ？そうかんがえりゃ、こいつら、ま、俺たちも含めて幸せ者だよな。」

ああ、そう考えたら言ってる。バスに揺られながら、俺は苦笑せざるをえなかった。

「聞こえてねーようだよ。」

聖奈と美和の顔が、無邪気だった。

バシャン！！

みたいな感じに波のしぶき音が聞こえたかと思えば、もうはや女子二人は泳ぎ回っていた。

「泳ぐの早っ!？」

「だって、もうお昼だよ？なんかこんかやってるうちに日が暮れちゃうよ!」

「・・・それはいいんだけどさ。」

「ン？」

俺は聖奈の辺りを見てブフツと吹いてしまった。

「うきわってなんだようきわって!」

「だって泳げないんだもん!海の水ってしょっぱいから尚更飲みたくないでしょ？」

「泳げなかったんだ・・・」

聖奈は例のうきわでばしゃばしゃ泳ぎながら、美和と何やら話すごとをしていた。不思議に思ったその瞬間――

「「えいっ!!」」

俺たちは二人にみとも簡単に水をかぶされてしまった。

「こらーっ！節も賢明もちゃんと泳がないとダメじゃん！！」

「早くきなよ」

賢明は苦笑して、服を脱ぎ棄て海に飛び込んでった。・・・マジかよ。

「おい、節！！お前も早く来いって！結構気持ちいぞ？」

「わ、わかってるし！」

慌てて服を脱ぐ。海パン姿になってもまだためらいがあった。

我慢できなくなった美和が俺の腕を引っ張る。

「ゲッ、待ってって！心の準備が・・・」

「心の準備だア！？どーせ節はスイスイ泳げちゃうんだしいじやんか！」

み、美和！そんなに引っ張るなよ！！う、うわうわ・・・波が・・・

バsshン！！

「あゝ！！！！やめろやめろ！！俺はやだから！！死ぬって（恐）」

自分でも驚きだ。こんなにパニくるとは・・・。

「せ、節ちゃん・・・？」

「も、もしかして節も・・・」

「「カナヅチ??」」

俺はやっこの思いで砂浜に上がると、息を上がらせた。

「マジかよ!?! お前スポーツ万能じゃないのかよ!?!」

「聖奈みたい・・・」

「私はまだいいじゃん! 水怖がなんないんだもん。」

俺はムツとした。

「俺だってプールだったら泳げるし! でも・・・海は駄目なんだよ!?! ガキんとき、おぼれかけて、しかも目の前魚泳いでて・・・トラウマになっちゃったんだよ!?!」

3人は顔を見合わせてプツと笑いやがった。

「なるほど、そっちな。」

「ご愁傷サマっ!」

「節にそんな過去が・・・WWW」

馬鹿にしたように笑われたが、妙に腹立たしい気分はしなかった。
一応、いじけたようにそっぽを向いておいたけどな。

「それじゃ、海で泳げない節のために、違う遊びでもすっか!」

「「そーしてやろー!」」

「なんだよ、そのイヤミ・・・」

っということ、ビーチバレーをして思う存分遊んだ。そこらへんにいる海水浴客のなかに、俺たちくらいの歳だったり、大学生みたいな人がいるが、俺たちのように楽しんでいた。多分、そちらか

らもそう思われてるんだろ。

「聖奈、そっち!！」

「おうよっ!」

ベグシャツ・・・

ああ・・・こんな立派な転び方をした聖奈を褒めてやろうじゃねーか。

あっという間、そんな言葉もあったな。今思えば、この時が一番当てはまった気がする。気が付けばもう夕方だ。

「え!?! なんかもう夕日が海を沈んでく言わば美しい光景になるんですけど・・・今何時!?!」

「6時・・・40分。」

「早い・・・。」

お互いに顔を見合わせた。

「まだ遊び足んない・・・。」

「何のための別荘だよ。まだ遊べるって!」

「そっか。」

「でも・・・海はもうだめだね。皆テント張ってる人ばかり。」

「んじゃ、別荘に行こうぜ。」

何故か、後ろ髪が引かれる思いだった。友達と行く海は格別だったのかもな。

別荘についても、大して楽しいこともしないで、飯食ってトラップやったり軽い遊びしかしなかった。

案の定、聖奈をはじめ美和も俺も退屈感を感じた。賢明は苦笑した。

「仕方ねえなー。あ、ここ少し歩いた場所に心霊スポットあるんだけど……」

その言葉に、聖奈はガキのように反応した。

「なにになっ！？そこホントに出んの？？」

「んー……出るらしいよ。体験者いるんだってよ。」

「マジでえ！？ね、いこいこb」

勿論美和は大賛成。

「節は？」

「あ、俺も行く。」

「ヤッタネ☆」

っということで、俺らはその心霊スポットやらに行くことにした。
意外にサラリと行く感じになったけど、そんで悪霊に憑りつかれた
らどうすんだかな。

でも、俺たちは忘れていた。この日の、夜の天気は・・・・・・・・大
雨、嵐だったこと。

ザアーツ・・・・・・・・

あとそんなに近い距離だったのに、こんなに降られたら、そりゃガッカリするじゃねーか。俺も心霊スポット結構楽しみにしてたんだぞ！

「しゃーねーな。戻るか？」

「え〜」

「今からいこつてのかよ!？」

「だってさあ、初めてじゃん。行きたい〜。」

確かに初めてだよな。そりゃわかるぞ。でもこれじゃあな……。と心の中で思いながら俺はただ黙ってた。不意に足元を踏んでみると、微かにぐにゃとした感覚があった。

「おい、なんか地面もヤバくなってきたけどー？」

「マジイ!？」

「ああ、思い出したけどこつて崖の上並みにもろかったっけ。もしかしたら崩れるかも……。」

途端に皆の顔が青ざめていくのがわかった。

「ホントヤバイじゃん! いや、マジで!! 標高高いじゃんよ!!!!」

思わず叫んじゃった。その時、足を賢明のほうに踏み込んだからその振動で、なんちゅうの……とにかく地面が崩れた。

ガシャッ!

大きな音。

「ギャー!!!!」

「ワァー!!!!」

それよりも大きな音と言えば、聖奈と美和の叫び声だった。地面は真っ二つに割れて、引き裂かれてしまった。

「節!？」

「ちょっと、どうなってんだよ!？」

そう言ってる間もなく、目の前が真っ暗になった。

なんか・・・ヤバくね？

・
・
・

「っちゃん、起きてる・・・？」

ん・・・？なんだ、この声。

「節ちゃん、しっかりしてよ！」

ああ、この呼び方は・・・。

意識がしっかりしてきて、目の前のものが見えるようになった。
そして、俺のすぐ目の前にいたのは・・・。

「あつ、節ちゃん・・・！よかった、生きてた・・・。」

聖奈だった。

「聖奈・・・。」

そういえば！と、俺はガバッと起き上がった。すっげえ頭痛いんだけど・・・。

「つてえ・・・ここどこだよ。」

「洞窟みたいだよ。私も気が付いたらここにいた。」

「洞窟？あれ、美和と賢明は！？」

聖奈は立ち上がって洞窟の外を覗いた。

「あの土砂崩れで別れちゃった。無事かな、二人とも……」

なんだろう、この感じ。いつもの聖奈じゃない。瞳自体が違うし、声も暗いじゃねえか。

「……」

思わずバリバリ頭を掻いた。居心地悪いじゃねーかよ、どうにかしてくれー。

「見てよ、まだ天気治まってない。」

「だな。」

俺も外を覗いた。なるほど、こんな大荒れの天気も偶にしか見ないな。

不意に、聖奈が俺に振り向いた。

「節ちゃん……」

「あん？」

「ねえ、ちよつと。」

ギュッと俺のリストバンドを掴んでくる。

「なんだようっせーな……っ。」

聖奈の顔を見た瞬間、息が詰まった。目に涙を溜めて、小刻みに

震えていたわけだ。

「なっ、何泣いてんだよ。らしくねーじゃん！」

「どうしょ・・・節ちゃん。」

「ハア？」

今度はリストバンドどころじゃねえ。俺の両腕を掴んできやがった。

「二人死なせたらどうしよう！？私の責任だよお・・・！！！！わあああ！！！！」

聖奈は泣きじゃくり始めた。こうなっちゃ、止められねえのはわかってる。

「チッ、どうしてテメーの責任になるんだよ？」

「だって、天気荒れてきたのに無理にいこって言ったの私だよ？ひつく。それで・・・こんなことになっちゃって・・・私が二人を殺したんだア！！」

「まだ死んだって確実じゃねえし！勝手にダチ殺すな！」

俺はつい荒々しく言ってしまった。聖奈ってこんなに自分責める奴だったんだな。今更気づいちゃった。

「それも・・・そうだね。」

ま、そのおかげもあってか聖奈は泣くのを止めた。泣き虫。聖奈の性格がまた一つ増えた気がした。

「でもさ、これからどうする？ 節ちゃん。」

洞窟の中にあつた岩で背中合わせにして、俺と聖奈がそれぞれ服の水を絞っていた時だ。

「天気治まんの待つしかねーだろ。」

「だけど、やっぱ二人心配じゃん？」

「この天気で外で歩こつてのかよ！？」

「・・・ごめん。」

やっぱりいつもの聖奈じゃねーのは確かだな。

「今、暇つぶしする物なんてもってなし・・・ヒマだね。」
「ホント、ヒマ。」

このまま二人で無言なまま雨の音を聞くわけにもいかによな・・・
いや、俺が嫌だ。

その時、また聖奈が話し掛けてきた。

「ねえ、会ったばっかの頃、覚えてる？」

「そんなもんいちいち覚えてられっかよ。」

俺のペシヤツとした言葉にも動じずそのまま話し続けた。

「節ちゃん、工業系のこと向いてんのに普通科の高校入ったじゃん。
何でって訊いたら」馬鹿だから”って答えたの。」

「ふうん。」

そんなこと言ったかも。

「馬鹿だからって具体的にどんなことなの？この高校、工業高校より
ずっとランク上じゃなかった？」

「まあ、そうなんだけどさ。」

俺は仕方なく話すことにした。

「俺も、中学の頃は工業に入るってゼツターに決めてたんだ。技術
の授業が一番好きだったし、実力もそれなりにあったからさ。」

「うんうん。」

岩ごしでの会話は、不思議な感じがあった。

「でも、親が反対してきたんだ。将来には普通科のほうが絶対いい
ってさ。自分のランクに合った高校にしろって何度も何度も。」

「え、なんで!？」

「知らねえよ。でも、今まで俺に何も言わなかった親だったんだよ。自分のことは自分で責任取れ、ただ他人にだけ迷惑はかけるなってこのときだけ、うるさく言ってきた。よっぼのことだって思ってた俺は言うとおりに受験しちまった。」

聖奈が押し黙っている気がする。

「馬鹿だよな、俺。そういうときこそ自分で決めるべきなのに。そうしたら、毎日がきつと楽しかったかもしれない。」

「今の毎日、楽しくないの？」

「なっ、なんでそうなるんだよ!？違うって。今は後悔してねえよ。工業に行けば、こんなに女のコもいなかったし、何より賢明と美和と、そして聖奈の様なやつに巡り会えなかったからさ。」

「そっか。」

聖奈の声質が明るくなった。そして、不意に岩の陰からぬっと顔を出してくる。

「なんだ。そんな、節ちゃん馬鹿じゃないじゃん。そう思えるんだからさ。私もねッ、今思ったよ。高校って巡り会いなんだなって。」

実は、この高校、ランクより上だったんだ。」

「え?」

「どんなテストうけても、判定はCかB。ギリギリ受かる可能性があるって感じだったの。でも・・・受かったかった☆それで、美和と賢明と節ちゃんに会えた!」

満面な笑顔だった。天気を覆すような、この時期に咲く、向日葵のような・・・

俺ももらい笑いた。

「お、嵐止んだみたいだぞ。」

「マジ!？」

洞窟の外から差し込む光に、俺と聖奈は顔を見合わせた。

「いやはや、あの時は凄かったねえ……」

「オジサン染みた物言い……」

ここは俺たちの秘密基地。なんと、あの後二人と合流して無事に戻ってこれたってわけだ!!」

「皆、風邪ひいてないのがスゴイ。」

「ほにゃらは風邪ひかないんだな。」

「言ってる。」

「俺、バカじゃないんだけど・・・」

「別にバカって言ってないしー?」

日常のお喋りだ。なんか、こういうのもささやかな幸せってやつなのかな。

でも、やっぱり・・・

あの砂浜でのことはいい思い出になったかな。

第5話 青葉・砂浜・恋心？（後書き）

次回もよろしくお願いします☆

第6話 鈍感なのは貴方だよ

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。．．．バシッ

「うん．．．．」

目覚まし時計が鳴り、乱暴にぶっ叩いた聖奈は、時計に付属している日付に注目した。

「8月．．．23日．．．．」

朦朧としている意識の中で、聖奈はポケポケしながら考えた。

「23日．．．二学期は25日．．．．ってえ!？」

思わずガバッと起き上がった。

「あと．．．2日しかない感じ!?! ヤバい!?!」

ベットから抜け出し、すぐに着替える。

「宿題終わってない!?!」

机に向かうと思えば、聖奈は部屋を出て兄の部屋に尽かさず入っていった。

「兄ちゃん！おいっ逞真！！」

逞真はまだ熟睡していたらしく、聖奈の声に反応し、邪魔そうに背中を向けた。

「うるさい・・・もう少し寝かせてくれ。今日は部活も会議もないんだよ。」

「いいから起きてよっ！！大変なんだー！！！！」

言うが早いか枕を兄の脇腹に叩きつけた聖奈。

「んゝ・・・やめなさい。怒るぞ。」

「ホント緊急事態なのっ！！」

「何があった。」

逞真はやっと聖奈のほうを向いた。

「夏休みあと今日入れて2日なの！」

「うん。」

「宿題終わってないわけ！！」

「だから？」

「手伝ってよ。」

怪訝そうにして逞真は体を起こした。

「何故。」

「兄ちゃん教員でしょ。高校の問題なんてへのカッパだよね？」

当たり前のように言う聖奈に逞真は嘲笑した。

「兄を呼び捨てした上に人にものを頼むときの礼儀も知らぬとは・・君の愚かさには心から褒めてあげたいね。」

「あゝっもう！！わかりました、お願いできませんかッ!？」

「まったく仕方がないな。可哀想な妹のために助けてやってもいいが。」

「あームカつくムカつくムカつく・・・」

「無駄口叩いてないで、宿題を持ってきたさい。ただし、数学だけだぞ。文学的な教科・・・特に英語！もう論外だからな。」

「勿の論だっ♪」

兄が文系の教科が大の苦手なことは既に知っていたため、ニヤニヤしながら部屋を出た。逆に考えると自分の苦手な理数系の教科が得意。有利だ、と考えたのだ。

逞真は重い溜息を吐いて自分のTシャツを脱ぎ、私服に着替えた。

「んじゃ、数学と理科は全部任せたからっ！あ、難しそうなところは

間違っという。怪しまれる。」

「おい、理科までやるとは言っていないぞ。」

「どうせできるんだしいいじゃん。こっちだって2日でできるよう努力します?」

「ああ、そう。」

みたいな感じでほぼ宿題を兄に押し付けた聖奈は、無事に宿題を制覇したのだった。

二学期の初日・・・

「おはよっ!」

「はよ・・・」

「節がいる・・・ってことは初日から遅刻!?」

「なんだよ、俺が遅刻マンだともいいたいのかよ?」

「ホントのことじゃなか。」

「節ちゃんも美和も話し込んでないでさっさと歩いて！」

「お、今日の聖奈は一段とシッカリしてるじゃん・・・」

「なんかヘンなもん食った？」

「べっつにいい♪」

ランラン気分で教室に入ると、当たり前のように賢明は既にいた。

「賢明今日も早いねーッ！」

「お前らが遅すぎなんだよ。」

「ホント、いい子ちゃんっ。」

「ほっとけ。」

学校での日常的会話が今始まった。

「はい、宿題の提出、出した人は返します・・・」

担任の台詞とともに宿題が返された。

「打田ー、本石ー、今野ー・・・」

節が聖奈に耳打ちする。

「岡沢のやつ、ヤクザの割に採点速いよな。」

「ホントさ。テキストに見てんのかと思えばそうでもなくてさ！やっぱ内面と正面は違うもんなだね、うん。」

「津田！駿河！」

「「ヘイッ！！」」

同時に呼ばれ、同時に返事し、クラスで笑いが巻き起こった。

「津田、また空欄か。お前も少しは駿河を見習え！」

「ハ？」

「宿題を全てやり、理数に至ってはほぼ正解ということをな。」

「なんでコイツを見習わなきゃならねえンだよ！？ウソじゃねーだろうな？」

「ウソじゃないもん！先生、聖奈も凄いですよねー？」

節は聖奈の宿題を見た。

「マジかよ・・・」

「たまにはこんなところも見せる駿河を褒めてやりたいところだが・・・」

聖奈が誇らしげな顔をした瞬間、悲劇的な言葉を担任・岡沢から口にされた。

「いままでの成績からしてこれは有り得ん！一体誰を使った！？久田か！？」

久田とは賢明の名字である。

「いや、俺は一切関係ないんですけど。」

「そうですねっ！いや、参考書メツチャ見て時間かけてやったんですよ。」

「ならこの字はなんだ？この美しさかつ綺麗な字。まるで学校の教員かなんかだと思わせるこの字は駿河とは懸け離れているだろうが！！」

それらの言葉が矢のように顔面に突き刺さり、聖奈はギクツとなった。

（ヤバイ・・・、兄ちゃんと私の字ってホント別。どう誤魔化そう・・・）

「夜中やってたんで、寝ぼけながら書いたらそうになりました（笑）」

「ハッ、本当なんだろうなあ？」

「ハイ？」

岡沢は流石に折れた。時間もないためさっさと宿題を返したのだ。

「聖奈、ホントにアンタがやったの？？」

「やだなあ、美和。」

ひそひそと小声で言い始める。

「勿論、うちの兄貴よ、兄貴っ。」

「そうかと思ったよ・・・。先生に気づかれなかっただけでまだ良かったじゃん。」

「ウフ。」

ハッピーな顔をしてイスに掛けると、じと目で節に睨まれるのだ
った。

そんなことのあった数日後のこと・・・

ガラッ

「入っていい？」

節が生徒会室のドアを開けた。

「あ、津田じゃん。なんか用？」

「ただヒマだから遊びに来ただけだけど。」

「そ、そうなんだ……」

奥のほうを見て節はニツと笑った。

「関口さーん。元気？」

「あ、節先輩……」

節が”関口”とよんだその彼女は生徒会所属の1年生。この頃遊びに来るため、知りあうようになったのだ。

「はい。おかげさまで。」

「俺なんもしてねえけどな。」

考えてみてのとおり真面目な優等生である。

「それよりさ、休み明けテストどうだった？ どうせ関口さんはいいんでしょ？」

「そんな、いいって程じゃないんですけど。」

「見せてよ。」

「は、はい……」

遠慮がちに評価用紙を節に見せる。

「うわ、流石関口さん。頭いい。ほとんど90点以上という！」

「ありがとうございます……」

「うちのクラスにさ、すんげえ馬鹿な奴がいてさ。平均点何ぼだったかな……42だっけ？ あ、45だ！」

「しつれーだなっ！48ですっ！！」

不意にドアのところで声がした。それはムツと怒った聖奈だった。

「かわんねーじゃねえかよ！」

「変わるし！その何点かさでテンション変わるんですっ。それに今回一つも赤点とらなかったんだよ！？」

「・・・ね。関口さんとは比べ物にならないしょ。」

「そ、そんなこと・・・」

「生徒会の人と比べないでよ！そうゆー、節ちゃんはとうだったんだい！？」

「俺は敢えてノーコメントで。」

「あー、赤点取ったんだ！そうでしょ！」

「うるせー！テメエも調子のもてんじゃねーぞ！」

「凶星だー☆」

そのやり取りに、ただ作り笑いしかできない彼女は、聖奈に話しかけた。

「貴方は何の要件ですか？」

「あ、ビデオデータ貸してほしいって放送部が。私、パシリ役にされちゃったよ！」

「ザマー！」

「うわ。こんな人と仲良くなっちゃ駄目だよ、関口ちゃん。」

「は、はあ・・・」

「俺の関口さんになにへんなこと吹き込ませてんだよ！」

「ジョーダンじゃんよっ。」

ビデオデータの入ったUSBを渡され、聖奈は帰っていった。

「節先輩、今の人は・・・？」

「ああ。今が俺の言った馬鹿な奴だよ。駿河聖奈っツーんだ。」

「駿河・・・聖奈さん。」

彼女の心にはかなりの嫉妬心が生まれていた。

その次の日の昼休み、聖奈の所に例の女の子が来た。

「こんにちは、聖奈先輩。」

「アレエ？関口ちゃんじゃん！なに？」

「ちょっと来てくれませんか？」

「ん、いいけど。」

聖奈は人気のない廊下に呼び出された。

「私、関口礼乃せきぐちのといいます。」

「あ、じゃあ次から礼乃ちゃんって呼ぶわ」

「はい。ありがとうございます・・・節先輩のことで一つ質問が。」

「え、節ちゃん？」

「ええ。不躰な質問なんですけど・・・」

「いいよいいよ。言ってみ！」

「・・・お二人は付き合ってるんですか？」

「・・・ヘイ??」

「ごめんなさい。変なこと訊いて。昨日、あまりに仲よくしてらっしゃったものですから。」

「付き合っていない付き合っていない!! 全然論外! 節ちゃんが友達以上の関係だって考えられないし!」

「そうですか。よかった。」

最後の言葉を自分に言い聞かせるかのように胸を撫で下ろした。

「え、よかったの?」

「あの・・・私、節先輩を好きになってもいいですか?」

聖奈は思わず口をパクパクさせた。

「そ・・・それはそれは。どうぞどうぞ・・・。」

「本当に、いいんですか?」

「あの・・・逆になんで私に訊くんですか??」

どうしても敬語になってしまう。

「本当に、仲よさそうだったので、付き合ったら悪いなと思ったんです・・・。」

「そ、そうなんだ。でも、節ちゃんみたいな人のどこがいい訳?」

「優しい方なんです、とても。私に凄く構ってくださいって、安心するんです。」

(や、優しいかあ?)

「笑った時、こっちも穏やかな気持ちになります。」

（あ、それはあるかも。）

しかし、節を心から好きになる人なんて初めて見た。”顔はいいけど、コワそう”だとか”厄介な人間関係になりそう”とか思っている人が多いのだ。

「礼乃ちゃん、節ちゃんが怖くないの？」

「最初は怯えていました。でも、話していくにつれて……本当の先輩の性格がわかって、いい人だなんて恋に堕ちてしまったんです……。」

「あら、カワイイ話。」

礼乃は切なそうに笑った。

「本当に良かったです。だから……聖奈先輩も応援してくださいね。」

「お、おうよ！」

礼乃は一礼して階段を下りていった。

聖奈は溜息を漏らす。

（ああ……大人しそうで……あんなに真っ直ぐな子、初めて見た……。）

トボトボと教室に戻ると、美和が小首をかしげていた。

「何だったの？あれ、生徒会の子でしょ。」

「うん。それが・・・節ちゃんを好きになってもいいかって訊かれた。」

「なんで聖奈に訊くの！」

「ね！なんか・・・カレカノっぽかったらしいよ。・・・そう見える！？」

「んゝ・・・やり取りはそれなりに。」

「ええ！？」

「だって似た者同士じゃんか。」

「んゝ・・・」

聖奈は美和の隣に腰かけて、天井を見た。

「なんかさ、思うんだよね。もし礼乃ちゃんが節ちゃんに告ったとする。ヘンに義理堅いところあるじゃん、アイツって。」

「うん、確かに。」

「だから恋人とか大切にするよね、きっと。」

「だろうね。」

「そうなたらさあ、3人グループになって・・・物足なくならない？」

「だね。でも・・・ホントにそんな日が来るかもしれないね。」

「え・・・？」

美和は真顔だった。

「3人どころか2人とか・・・もしかしたら最終的に孤立しちゃうかもよ？」

「じよ、冗談やめてよっ！！」

「真に受けないでよ。・・・直接節に訊いてみたら？」

「うん。チャンスが来たらそうしてみる。」

帰り道、4人で帰ってるのだが、聖奈の家が近づくにつれて皆自分の家のほうへ別れていき、一番最後はいつも節と聖奈の二人になるのだ。

これはチャンスだと思った聖奈は節に話題を振った。

「ねえ節ちゃん。」

「あん？」

「礼乃ちゃんいるじゃん。」

「関口さん？」

「そう。どう思う？」

自転車に乗りながら、節は不自然に頭を掻いた。

「どう思うって……ってかなんで答える必要あるんだよ!？」

「いいから。」

「なんだよそれ……。——可愛いんじゃない?。」

聖奈は思わず驚愕してしまい、節に振り向いた。

「あっ、かつ可愛いよね！うん。」

「聖奈と真逆だしさ。」

「どうゆー意味よっ！」

「ハハッ。でもなんで関口さんなんだよ。」

「だって・・・最近よく生徒会室行くから。もしかしてホレちゃった??」

「バーカ。俺に好きな奴なんていねーし。ま、お前は別だけどな。」
「え」

思わず息詰まってしまった。

「えってなんだよ。なんかツツコめよ！俺がサミーだろ!？」

「え、あ。ゴメン。」

「まさか真に受けた感じ？バカじゃね？」

「真に受けてないもん！！ただ考え事してたのっ！この話題忘れてっ！！」

「へーへーッ！」

そのとき丁度のタイミングで分かれ道となった。

「あ、じゃあね、節ちゃん。」

「ああ。また明日なー。」

節と別れた後、聖奈はずっとさっきの言葉が気がかりだった。

『——可愛いんじゃない?』

（確かに可愛いよ、礼乃ちゃん。でも、ホントはどういう意味だったんだろ。好きな奴いねーしとかいっというただ冗談っぽく言って

ただけかも。ってかなんでこんな気になるんだろう。別に3人になっても少し寂しくなるだけなのに。」

考えてるうちに、見慣れた車に遭遇した。

「あ、兄ちゃんの車だ。」

学校から帰るところだったらしい。そちらも気づいて止めてくれた。

「今日は早いな。おかえり、聖奈。」

「ただいま。のっけてくれんのっ?？」

「乗る前提な言い方。まあ、あと1キロ半はあるしな。乗れよ。」
「ラッキー♪」

聖奈は逞真の車に乗った。

揺られながら、聖奈はふと逞真に訊いた。

「ね、もし兄ちゃんのスッゴイ親しい友達がいるとして。」

「心理テストか何か?」

「そんなところ。で、その人が好きな人が登場したらどうする?あと、そのあと付き合ったりしたら。」

逞真は数秒ほどの短い間に考え、言葉を発した。

「好きな人ができた程度なら、何も考えない。誰が誰を好きになろうと勝手だから。」

「うん。」

「もし付き合ったとしたら……素直に喜びたいかな。実践できるかはそのとき次第だが。」

「そっかあ。」

「でも……」

言葉を付け加える逞真。

「その友人が異性なら、話は別かもしれない。」

「え、何で？」

「それは、聖奈自身が考えてみなさい。」

聖奈は頬を膨らまして、背もたれに横たわった。

「なんでだよ……」

「お前、学校で何かあったのか？」

「別になんもないよ！そう見える？」

「ああ。まるっきり悩んでいる様子だ。それに、この状況で今のようないふこと訊かれたら大抵はそう思うだろうよ。」

「そ……。マジになんもないから。いやホント。」

「今日は早く寝れば。なんにせよ、それがいい。」

「うん。そうさせてもらう。」

その言葉とともに、車がアパートの前に止まった。

次の日の放課後、節はまた生徒会室に遊びに来ていた。

「でさ、うちの担任が超ヤンキーでさあ。」

「あ、確かに岡沢先生ってそんなイメージあります！」

「でしょ？影でのあだ名は岡沢組長……」

礼乃はフフツと上品に笑った。

「ねえ、急に話題変えるけどさ、関口さんって告られたことないの？」

「あ、ありませんよ!!」

「ウソ、絶対にあるでしょ。顔可愛いし！」

「そ、そんな……全然です!!」

「じゃあ、自分がホレられてるなって思ったことは？」

「あるはずないじゃないですか!こんな私なのに……」

「ホントにそう思うわけ?もったいないな、鈍感だね、関口さん。」

「えっ……?」

すると、ドアの向こうで聖奈が通りかかる。

「あ、聖奈聖奈!!」

節はすぐに生徒会室を出てしまった。礼乃は少しだけ切ない顔をした。

（また・・・聖奈先輩・・・）

また、違う日の放課後にも・・・

「今日は一段と聖奈がアホだったんだよ!!」

と、聖奈についての会話が始まり、礼乃は心の中で溜息を吐いた。

礼乃は思い切って節に接近するためにお弁当を持っていくことにした。

「あの、節先輩。」

「あ、関口さん！」

「あの・・・その・・・」

妙に緊張してしまい。言葉が上手く出ない。

不意に

「賢明ー、宿題教えてー！」

「あ、アタシも♪」

「またかよ……。ま、慣れたからいいけどなっ。」

という3人の声が聞こえた。

「あの……。これよかったら食べてください！！」

思い切って差し出したとき、礼乃は啞然としてしまった。節の瞳が……。こちらではなく、3人のほうを見ていたのだ。

礼乃は節の想いを察して、俯いた。その場にいるのが辛くて、思わず逃げ出してしまった。

「で、話って……。あれ？」

節が礼乃のいたところを見るころには、礼乃はこの近くにはいなかった。

「なんだあ？」

「おい節！お前はいいのかー？」

賢明の声に反応し、節は何もないかのように3人のほうへ駆けて行った。

「俺も頼むーっ！！」

その日の放課後に至っては、節は生徒会室に寄らなかった。

礼乃が家に帰ろうと歩いていた時、不意に節と聖奈を目撃してしまった。そちらも帰る途中らしい。声を掛けられたら気まずく感じるだろうと思い、礼乃は距離を置いて歩くことにした。しかし、二人の会話は聞こえる。

「ねえ、どうしたらスイーツ食べても太らないの!？」

「俺がそーゆー体質だからっ♪」

「うわ、なにそのイヤミっ。ゼツタイ私より甘いもの食べてるのに体細いよね。」

「聖奈だってかわんねーだろ。」

「皮肉に聞こえる・・・」

彼が甘いものが好きだと初めて知った。その時点で礼乃は悟っていた。

（やっぱり、私には遠く及ばない。私と聖奈先輩とで話している話題が違うもの。だから・・・一生貴方とは結ばれないでしょうね。本当に些細なことだった。貴方にとってはどうにも思わなかったことかもしれない。だけど、私の心には深く刻まれた。私に話し掛けてくれて、本当に嬉しかった。節先輩、ありがとうございました。最後に、心の中で伝えたいことがあるんです。いいですか？）

礼乃は涙を浮かべ、静かに呟いた。

（自分の気持ちに気づいていないのだとすれば、鈍感なのは貴方、

ですよ。
）

「え、生徒会室行かなくなったの？」

「礼乃ちゃんはどうしたー！？」

「お前、ヒデエ奴だぞ！」

秘密基地でキャッチボールしながら、3人に言い放たれた。

「仕方ねえだろ、厭きちまったんだから！」

「ねえ、節ちゃんって鈍感？」

「ハ！？」

「礼乃ちゃん、節ちゃんのこと好きだったんだよ！？」

「え、関口さんが俺を・・・？マジ？」

思わず野球ボールを地面に落としてしまった。

「んなこと知らねえよ！もし告られたとしてもフツただろうし。」

「えー、付き合わなかったんだ。」

「だって、こうして遊べなくなるだろ？」

「単純な奴だなあ。お前、一生彼女できないと思うよ。」

「ほっとけよ！」

節の呆気ない喋り方に、聖奈は少しホッとしたのであった。

第6話 鈍感なのは貴方だよ（後書き）

聖奈のこの思いって普通の友情でなんだろうかね。
まさか・・・ねえ？↑何がだよ

次回もよろしく願います☆

第7話 悲しみの琥珀

節の着けるアクセサリは日によって変わる。

ある時は十字架、ある時はドクロ・・・そしてある時は宝石だったり。

ここまでアクセサリを変えられるってことは、相当持っているということⅡ金持ち。という風に感じられる。

聖奈も美和も賢明もクラスメイトにどれだけ質問されたかわからない。

「ねえ、津田って金持ちなの？」

と。しかし、本人に訊いたこともなかったため、答えることができなかった。ただ、3人はこれだけは知っていた。

” 親は、どこか大きな会社の権力を握っていたらしい。”

だから、金は結構持っていたもおかしくなかったが、親友としてもそんな失礼なこと確かめたくはなかった。

そんな節にも日常生活がある。最も、4人でいる時間が一番多いのだが、家族でいる時間も必ずあるわけだ。

ガチャッと扉を開け、家に入る。無言で帰るのはいつものことだ。

「あ。お帰り節。」

「ん。父さんと母さんは？」

「まだ仕事だって。あ、会議とかもあるらしいからテキトーになんか食べてって。」

「ふーん。」

節の言葉に頷いたのは、弟の咲^{てる}だった。現在小学6年生で受験勉強に励んでいる。

「咲くーん、そんなに勉強したら逆にバカになっぞ？そのうち死んじゃっても知らねーから。」

そう言って整った坊ちゃんヘアである咲の髪をくしゃくしゃにした。

「頭やめろつつってんだろ！？人は勉強して死にませんっ。」

「いい子だねー、まるで賢明みてえ。」

「賢明さん一緒にしてくれるんなら、すっげー嬉しいんですけど。」

「うわ、貶したつもりなのに。つまんねえ。」

「逆に、節と一緒にされるほうがよっぽど貶されてるし！」

「可愛くねー！」

節は興がそがれたように、部屋に入った。

（暎、親に騙されたらいけねえぞ。俺、わかるからな。自分だって昔暎みたいだったんだ。それで親の言われたとおりに勉強してきて今中途半端な生活してる。自分が何やりたいのかもわかんね。暎にはそんな風な人生送ってほしくないんだぞ・・・。）

節は普段思っていることを表に出さないが、それゆえに心の中で深く考えてることがある。こういう人物だからこそ、心を開く相手は少ないのかもしれない。

そんな節の親は、確かにすごい権力者であった。

父親は車の販売を専門とする会社の店長。というのは表書きで、本当はその会社を裏で助け社長に貢献し金を沢山もらうなど大いなる支配者なのである。

一方母親は昔父親と同じ会社で働いていたが、今は社長の秘書やなんかを任されている。

その双方はかなりと厳しいイメージが強い。節も何度も恐れ、嫌い、反抗している。節が大人に反抗するようになったのも、大方親のせいだと思えるべきだと思う。しかし、顔だけは節同様美人であった。若くして節を産んでいるため、意外と歳も若いほうである。

「節。貴方また赤点取ったの!？」

母親が在宅するときはこの言葉は毎回のように聞くだろう。

「はぁ・・・。別にてめえには関係ないだろっ!？」

”てめえ” ってそれが親に向けて言う言葉？」

「っるせーなっ、いちいちいち・・・。俺がどうしようと勝手だろうがよ!俺よりも・・・」

テーブルに座る弟・暎を指差す。

「暎のほうは何倍も辛いんだよっ!」

「暎を使わないの!!」

「節、俺辛いし。」

「なっ、せっかく助けてあげたのに礼もなしかよ。」

「別に頼んでないし。」

これが日常といっても過言ではない。節は毎回家が嫌で嫌で・・・なるべく外にしようとするのだ。

そんなある日・・・

節のアクセサリーがガラツと変わった。

「ん、あれれえ??」

聖奈は節の首元を見て、にんまり笑う。

「今日はわかったよ! 節ちゃんネックレス変えたでしょ。」

「ん、まあな。」

「なんで? なんで? また宝石だけど、今度はどうしたの?」

「別に・・・なんでもねえよ。」

何故か節はノツてくれず、気まずい雰囲気が続いた。

「それ・・・琥珀^{コハク}っていうんでしょ? 綺麗な石だね。」

「そうだな。」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「なんかツツコんでよっ!!」

「・・・・わり。今日はムリだ・・・・。」

「なんで今日に限ってムリなのさ??」

「・・・・・・なんでも。」

「は。」

今日の節はなにかがおかしいってことは聖奈も気づいていた。しかし、美和と賢明がやってくると普段通りに戻ったため、何も気にしなかった。

しかし、毎日節がその琥珀を身に纏い、変えるとしてもそれ以外のアクセサリーだったため、妙に思った。まるで、琥珀を大切にしているようだったから。

帰り道、聖奈は不意に訊いてみた。

「節ちゃん、その琥珀ってなんか意味あんの？」

「別に。」

「だって毎日してんじゃん。」

「それだけで決めつけんのかよ。」

「別にそうじゃないけど……」

「だったら訊くな。」

聖奈はムツとして叫び散らした。

「最近節ちゃんおかしいよっ！！琥珀の話になるといつもそうじゃない！ゼツタイなんかあるでしょ。私はそーおもったらきかないからね！？」

節はその真っ直ぐな瞳に溜息を吐いた。

「他の誰にもいうなよ。」

「うん。」

「賢明や美和にも、話せるときがきたら話すから言わないでくれよ。」

「わかったよ。」

「……母親が、死んだんだ。」

聖奈は一瞬頭が真っ白になった。

「え、死んだ・・・？」

「死んだ。」

「なっ、なんで・・・」

「自殺だよ。」

「じさ・・・っ・・・」

聖奈は急に胸が苦しくなって、言葉が出なくなった。

「色々苦しんでたらしいぜ。社長が秘書以上のこと頼んで来たり、ヘンなことやらそうとしたり脅迫したりさ。俺になんも教えてくれなかったくせに。」

「・・・じゃあ、それはお母さんの・・・形見・・・？」

「形見っちゃんあそういうもんになるのかな。。」

節は首の琥珀を手に、空を見上げた。

「急だったんだよ。ホント。帰ってきたら、親父に

『母さんが、今さっき亡くなったよ・・・』

っていわれてさ。思わず焦ったよ。病院行って霊安室覗いたら、

確かにそこに、母親がいたんだ。白い布被って。まるで雪みてえに白くてだけどそれよりも冷たくてさ。

『なんでもっと早く教えてくんなかったんだよ!?!』

『母さんが言ったんだ。節には言うなって。』

最初、ナメてんのかって思ったよ。だけど、それにはわけがあったらしい。

『節はきつと友達と楽しく遊んでる。そんななかで親が亡くなったって知らせが入ったら、どれだけ傷つくんだろうって。ほら、母さんが手紙を。』

俺はそれを開いた途端、馬鹿馬鹿しくなったよ。

”節へ。

今までうるさく言ってごめんなさいね。節のため節のためって思ってたけど、今思えばちゃんと子供のそばにいてやれなかったのにそんなこと言う資格無いなって思ったの。

お母さんも、節の気持ち気づいてたよ。親の言うことばかり聞いてたら、自分でやりたいこと見つけれなくなるんだよね。だから反抗して、暎のこともとても気にかけて。でも、人生に失敗してほしくなくて、だからつい口うるさくいっちゃったんだと思います。これからは自分の意志で人生を決めて行ってください。貴方は本当に優しい子だから。そういう子に育ってくれて感謝の気持ちでいっぱいです。お母さんはもう駄目です。だから、さようなら。

貴方の母。”

馬鹿馬鹿しくなったのは自分がってことで、親はきちんと気づいてたのに、何であんな反抗しちゃったんだろうって。もつと、できることがあったんじゃないかって。そう思った。」

節の言葉がどんどん自虐的になっていく。

「ホント、馬鹿馬鹿し。俺がマヌケに遊んでたときに母さんは考えられねえくらい辛い思いしてたんだぞ？なのに、俺は自分勝手に色々やって、親困らせて・・・何やってんだよって話だよな。」

聖奈は何も言えなかった。こんな時に声かけたってなんにもなりやしないって。その代り、節の腕をとり、ギュッと抱き着いた。

「あんなに毛嫌いしてたはずなのに、今はそんな気持ち全然なくて・・・ただひたすらに悲しくて空しくて仕方ねえんだよ！！あんな大切な人がもういないんだって自覚した時、思い出の品は全部やけになって前に捨てちまって、この石くらいしかねえんだって・・・なんだよ。」

琥珀の石を握り締める。

「これ、母さんが俺の誕生日に昔買ってくれたんだよ。全然使わなくて、捨てるのも忘れたくらい奥のほうにあって、今頃つけ始める。最低な奴だって思わねえか？」

聖奈は節の腕に顔を埋めたままピクリともしない。

「死にたいって思ってもさ、死ねなかったんだよ。受験するって決めちゃった弟だっているし、なによりお前や賢明や美和がいるよな。って。なんも関係ないのに急に俺が死んだってなったら、今の俺よ

りお前らはショックだろうと思って。だから、俺は生きるよ。」

腕にある暖かな体温が微かに震えていた。

「申し訳ねえ。八つ当たりするつもりなかったんだよ。ごめんな。」
「うっ・・・ひっく・・・ぐす・・・」

聖奈はしゃっくりを上げ始めた。

「何泣いてんだよ。お前が泣くようなことじゃねーじゃん。」
「だって・・・節ちゃんの考えてることが、凄いわかるよ。家族が亡くなるなんて、そんなこと私考えられないもん。節ちゃんの吐く一語一語が悲しくて・・・涙が止まなくなっちゃったよお・・・」。

「ったく、馬鹿じゃね？」

「今は馬鹿でいいもん。グスッ・・・ただ今は自分に正直になっ
てるだけだし。」

「聖奈・・・」

節は辺りを見渡し、頭を掻いた。

そして・・・聖奈の頭に手を載せる。

「ありがとな。」

「うん。・・・節ちゃん、もう死ぬなんて言わないでよ？」

そのままの体勢で眩かれ、節は苦笑した。

「・・・ああ！」

節は今まで通りに戻った。

首に下げたある琥珀を見ると、聖奈はいつでも心がいっぱいになるのであった。

第7話 悲しみの琥珀（後書き）

ああ・・・悲しいですね、節。

それにしても、節に異変起こってる気がしません？

今回優しかったし・・・まさか・・・

次回もよろしく願います☆

第8話 節の本音

この頃美和の様子がおかしい。授業が終わり、休み時間になると

「はぁ・・・」

と不安そうに携帯を見ては閉じ、溜息を吐いているのだ。

それに逸早く気づいたのは賢明で、最初は気に留めなかったものの、ときが経ってくにつれてだんだん気になっていったわけだ。

「よう、美和。なんかあった？」

「あ、賢明！・・・いや、別になんでもないよ。」

その言葉を聞いて、賢明は困ったような顔をした。

「絶対違うだろ。何があったんだよ。」

「・・・」

「俺たちの仲だろ？なんでも相談出来んじゃないのか？」

「・・・だよね。」

美和は賢明を信じて、微笑んだ。

「誰にも内緒にしてくれないかな？結構噂になったらヤバイことだから。」

「勿論。」

「賢明を信じてるから、だから言うからさ。」

「おう。」

決心したように再び美和は唇を開いた。

「姉ちゃんが、行方不明なんだ。」

「行方不明」

「うん。ここ何日もずっとでさあ。一度だけメール入ったんだ。」

そう言って賢明に自分の携帯をみせる。

「美和、沙和さわの分まで家に貢献しろよ（＾Ｏ＾）／サラバだ！」沙和

賢明はフウツと小さく溜息を吐いて、顎に指を当てた。

「なんか悩みがあったような書き方じゃねえなあ・・・。」

「そうなんだよ。でも急にいなくなったらこれなんか関わってんのかなって思って、だからさっきから携帯見てたわけ。」

「確かに」沙和の分まで”って書いてあるしな。親と喧嘩でもしたんじゃないの？」

「そうなのかなあ。」

「なんか心当たりとかないの？」

”あ”といって美和は賢明に耳打ちした。

「あんま大きな声で言えないんだけどさあ・・・」
「なになに。」

コソコソと伝える。

「援助交際!？」

一気に注目を浴びる二人。美和はブンブン首を振って賢明の肩をベシッと叩いた。

「バカっ! 声デカいってーのっ!!」

「わりわりっ! でも・・・今確かに援交って言ったよな？」

「うん・・・。だって見たんだ、前。姉ちゃんが、男にもらった金を数えてんの・・・。そのことで問題になって、もしかしたら家を出ることになったのかも・・・!」

美和の言葉がだんだん強くなっていて、ついには泣き出してしまった。

「なんで・・・! ? どっから間違っちゃったんだよお・・・!!」
「!」

「美和・・・落ち着けよ・・・」

賢明は机に顔を伏せる美和の背中を静かにさすった。

「お前がそんな泣くことないだろ？」

そして美和の前の席に腰かける。

「そりゃ、姉貴が行方不明になって心配になるのはわかる。ヘンな心当たりがあつて考え込むのさ。でも、それは美和がそんなに悲しむことじゃねえよ。」

美和は思わず顔を上げた。

「それはお前の姉貴のことで、美和のことじゃねえんだ。大丈夫、なんとかなるさ。」

賢明の今の言葉が身に染みて、美和は涙ながらに微笑んだ。

「ありがと・・・賢明・・・。」

「いや。」

「あつ、賢明！このこと・・・節と聖奈にも言わないで！！親しい関係だとさ、言いづらいことだってあるじゃん？」

賢明は美和の気持ちを悟った。

「わかったよ。俺も、いち早く解決するよう手伝えることは手伝うからさ。」

「よろしく・・・頼むよ。」

その日から、二人は二人だけの話題で話すようになった。勿論、美和の姉・沙和のことであるが、そんなこと他人は知^{ヒト}ったことじゃない為、まるで節と聖奈を仲間外れにするようにまた付き合っているように見えたのだ。

「美和、それでさあ……」
「うん。え、マジで!？」

それを見ていた節と聖奈は別に何も気にしなかった。仕方なくこちらも二人だけで話しているが。

「別にいいよねえ？」
「んー。帰るときも最終的にペアで別れるし、そこで積もる話題でもあんじゃねえ？」
「だよねー。節ちゃんのお母さん亡くなったときだってこんな感じだったし。あ、そういえば昨日コンビでさ、新しいプリン発売したんだよおー！」
「うっそ、そこどこだよ!？」

そしてその昼休みのこと。聖奈はクラスメイトに声を掛けられた。

「ねえ、聖奈。」

「ん、どうかしたあ??」

「最近さ、どうしたん・・・?」

「・・・なにがあ?」

「4人の仲だよ!最近2、2に分かれてるじゃん!」

「そうだけど・・・そんなに気になること?」

「だって、クラスで結構噂になってるんだよ?美和と久田君が付き合ってるとか、2人ずつでケンカしてるとか・・・。」

聖奈はブンブン首を振った。

「ケンカなんてしてないよっ!!なに、そんな噂になってんの!?」

「ちょっとね。だっていつも4人でいるでしょ?」

「まあ、そうだけど・・・。」

「じゃあ、付き合ってたとかは?」

「うーん、多分ないとは思うけど・・・。」

聖奈が賢明を美和の姿を上目で見詰めた時、節がやってきた。

「よう、聖奈!ってどうした?」

「あ、いや別に??」

クラスメイトが

「この二人は?」

と訊いてきたので、聖奈は声を張って

「絶対違いますっ!!」

と答えた。

その日の帰り道、聖奈はまるっきり学校から節と二人だけで帰った。

「節ちゃん。」

節は自転車、聖奈は歩き。不利だと言い出した聖奈をしようがないから節が乗せてあげている。

「あん？」

「昼休みさあ、私女子と話してたじゃん。」
「あー。」

「噂になってるらしいよ。賢明と美和のこと。」

それだけで節は察した。

「らしいな。いきなり二手に分かれちゃ、誰だってそう思うだろ。」

「流石の節ちゃんもそう思うかあゝ・・・」

「流石のってどーゆー意味だよっ!？」

「ははは。」

「何笑ってんだよ。ヘンな奴だなあ。」

「やっぱ、二人だけじゃあ、物足りない気がするな。」

「そうかあ？」

聖奈は前に美和が言っていたことを思い出した。

『でも・・・ホントにそんな日が来るかもしれないね。3人どころか2人とか・・・もしかしたら最終的に孤立しちゃうかもよ?』

節が礼乃と仲が良かった時の言葉だ。

「ホントに、付き合ってたのかなあ、あの二人。」

「さーなっ。」

「真面目に考えてよ!」

節の呆気のなさにその背中をベシッと叩くと、思いも由らない言葉が返ってきた。

「ま、美和と賢明が付き合ってもいつか。だってそうだったら、聖奈と付き合えばいいんだもん。」

「え・・・?」

節は黙ったままだ。聖奈は自転車を止めようと、精一杯足を地面に引きずった。仕方なく節はブレーキを掛けた。

「なんで急に止めたがんだよ。」

「・・・それ、また下手な冗談？」

「何言ってるんだよ。」

「ってことはマジ？」

「マジ。」

「・・・ウソォ・・・？」

「それじゃ、駄目か・・・？」

珍しく、節の言葉に”真面目”なものが含まれた。顔も見れば深刻だった。

「駄目って言うか・・・節ちゃんと今以上の関係になんの考えられなくて・・・節ちゃんとは高校生活でずっとこのままだと思ってたからさ・・・勿論賢明も!!」

「・・・っ。」

節は再びペダルをこごうとした。

「待って！待ってって、節ちゃん!!」

聖奈の言葉は届かず、自転車はぐいぐい進んでいく。節の心情は風の様な勢いが感じられた。

あっという間に聖奈の家に到着してしまった。

「・・・ありがと。」

そういうと、節もサドルから降りた。

「え？なに、寄ってくるの？」

「入ってきてんだ。」

「で、でも・・・」

「どうせまだ夕方だろう？あの兄貴夜になんねーと帰ってこねえって。」

「

アパートの駐車場を見て吐き捨てる。聖奈のスクールバックを引っ張って、無理矢理家に入った。

聖奈の部屋に入ってから節の熱情ぶりには、聖奈も驚きのあまり黙り込んだ。

聖奈をベッドに押し倒して、その上に自分が覆い被さって、まるで悔しがる子供の様な表情で想いを口にしながら始めたのだ。

「お前・・・気づいてなかったのかよ。俺、ずっと前からお前のと好きだったんだぞ？砂浜で洞窟にいた時にこの気持ちに気づき始めて、母さんが亡くなってお前にそれ伝えた時はもう確信してたんだ。聖奈のことが好きなんだって。大好きだって。お前と話してた

ら、嫌なことは全部忘れられて、心が安らいで、他の二人とは違う感情抱いちゃったんだ。」

「……………」

こんな状況初めての聖奈は、ただただ黙るしかなかった。声を出すことができなかったのだ。

ガチャ

玄関が開く。逞真だ。

逞真は玄関にある靴を見て、思い切り不機嫌な顔をした。眉根を寄せて

「津田……………」

と静かに呟く。思考回路を循環させると、逞真は不安で不安でいてもたってもいられなかった。

自分の荷物を置き、聖奈の部屋の扉による。ドアと壁の隙間を覗くと、二人の姿が見えた。思わぬ二人の体勢に驚愕したが、声を漏らさないように部屋の中を覗いた。

「・・・賢明と美和が付き合っているようがなかろうが関係ねえんだよ。俺の気持ちは変わんねえ。だから、付き合ってくれ！聖奈、お前の気持ちはどうなんだよ！？なあっ！？」

聖奈はガクガク震えていた。涙目で節を見ている。

聖奈も流石に感じただのだ。節が怖い。クラスの皆が言っていることが今ならわかる気がする。

妹がこんな状況に遭っているのに、逞真は動けなかった。自分の情けのなさに、冷笑する。

「何か言えよ・・・おい。」

節は聖奈のシャツの襟のボタンを乱暴に外し、顔を近付けた。聖奈はその肩を掴んで悶えようとした。

「フッ、何だお前。初めてなのか？ハハ。」

目が笑っていない。耳元でそっと呟いた。

「まだ何もしてないだなんて・・・真面目だね。まるでお前の兄貴のよう・・・」

その言葉に聖奈はカッとなって癇癪を起した。

「違う、聖奈は兄ちゃんみたいな真面目じゃないっ！！なんでみんなそんなこと言うの？真面目真面目・・・兄が例えそうだとしてみ妹の私にはカンケーないじゃん！！なのに二人一緒にされてさ・・・。兄ちゃんのせいで、私のやりたいことも制限されてるんだよ

っ？私だって今どきやりたいことだってあるよ！！なのにできなくて・・・そのせいで真面目って言われて！」

（聖奈・・・お前、こんなこと思っていたのか・・・？）

その心情には逞真も啞然となった。心にチクチク何かが刺さった。

「聖奈、落ち着けて。」

「ヤダッ！！」

「落ち着けて言ってんだろ！？」

「ッ」

節は、無理矢理聖奈にキスをして口を封じ込めた。聖奈は頭が真っ白になって、押し黙った。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・」

逞真のほうも、あまりにも衝撃的で今まで立っていたところ、床に崩れ落ちた。体の震えが止まらない。

（今の高校生というものは・・・こんなに激しく、痛々しく魅せつけられるものなのか・・・！？）

それから、しばらく時間が経っていた。

気まづくなり始めた時、聖奈が口を開いた。

「帰って、節ちゃん。」

「聖奈・・・」

「節ちゃんの気持ちは、よくわかったよ。でも、自分の気持ちが整理できないんだ。ごめん。だから帰って。帰ってよ！」

最後を少し怒鳴り気味に、聖奈は言った。節は無言でドアを開ける。

部屋を出ると、リビングには逞真がいた。服は私服に着替えており、コーヒーを片手にパソコンをいじっていたのだ。

（ゲッ・・・駿河逞真・・・）

逞真は節に気づき、ゆっくりとそちらを向いては、ギロツと一段と冷酷な瞳で睨んだ。

節はギクシャクしながら

「お邪魔しました。」

とだけ言い、玄関を出ていった。

聖奈は、自分の部屋でベッドに横たわっていた。不意に起き上がると、そこには節の母親の形見である琥珀があった。おそらく、キスをしたときに、勢いで切れてしまったのだろう。

急いで渡しに行こうと部屋を出ると、兄の姿にビックリした。

「うわっ、兄ちゃんいたんだ。おかえり。」

「ただいま。今日午前授業だったんだよ。部活済ませて残業終わらせたらいつもより2時間近く早くなったというわけだ。」

「そ、そっか。」

「・・・どうした？様子がおかしいぞ。」

「う、ううん！ちょっと外行ってくるね！」

そそくさと家を出る。

「おい、外は雨だぞ。」

そういう頃にはもう聖奈はいなかった。

雨の中、辺りを見渡すと、節はいなかった。途端に涙が出てくる。顔に当たるのは果たして雨なのか涙なのかわからなかった。

「うう……はあっ……」

聖奈は泣き崩れた。雨は、自分の心までも叩きつけてきたのだ。た。

家に入ると、逞真がタオルを聖奈の頭に置き、クシヤクシヤと拭き始めた。

「うわっ！ぐえ……」

「ぐえは余計じゃないのか？お前傘差さないで行っただろう。ずぶ濡れだ。」

「ううううう……」

温かい涙まで出てきたが、タオルが拭ってくれていいフォローとなった。

「も！ガキじゃないんだから自分で拭くし！！」

「なんだ？せっかく手伝おうとしたのに。俺がここまでするのはレアものだぞ。」

「ベツツに頼んでないしー？」

そういう聖奈の表情はいつものように戻っていた。

「目薬、貸すか？」

「え、まさか目え腫れてるカンジ？？」

「割と。」

「ギャー！貸して貸して！！べ、別に泣いたんじゃないよ！？雨のせいだよ、雨！」

「ほう。」

逞真は敢えてそれにふれないで、目薬を渡した。逞真は微笑んでいるものの、心の中では聖奈に申し訳ない気持ちだった。

（明日になれば、元通り友達として話すことができるよね。）

聖奈はそう思っていた。

しかし、友情関係というものはそうそうやわなものじゃない。途
轍もなく難しいものなのだ。

第8話 節の本音（後書き）

節、告りましたねえ・・・。

なんか、ヒートアップしてねえ？ 節ちゃんよお・・・（^^;）

とにかく、次回もよろしくお願いします☆

第9話 離れゆく仲

節が告白した次の日、聖奈は節に琥珀石を渡せないまま、時間が経とうとしていた。

「……ズビ。」

昨日の雨のせいか、物凄く体が怠いのだ。

「うゝ……お腹重いし、頭痛いし……学校休むかな。」

聖奈は携帯を開いて美和にメールした。

「ま、これでよかったのかも。あの後節ちゃんに会うのちよつと気まずいって思ってたし♪」

なんて、のん気に文字を打っていった。

学校

「ん、おい今日聖奈は？」

節が、ガランとした聖奈の机を見ていった。

「あー、今日休みだって。体調悪いらしい。」

「マジかよ……」

節は心底ガツカリしたように机につつぶった。

（俺の答え、きけねえじゃねーかよ……）

不意に首のネックレスを触る。

（琥珀だけ、ないんだよな。どっかで落っこしたみてえだけど、聖奈の家に行くまではあったんだ。おそらく、切れちまったんだよな。あのときに。）

溜息を漏らすと、賢明が普通通りに頭をこついてきた。

「どうしたんだよ、節！まるで失恋したかのように。」

「うっせーな賢明ー。それよりお前らどうしたんだよっ！？」

「どうしたって??」

「話題とやらは済んだのかーっ？」

「ああ、なんだ節も気づいてたのかよ。解決したぜ。なあ？」

「おうよ！賢明のおかげさんで♪」

「よかったなー。」

「なんだよその言い方。」

「別にイ？」

テンション下げ下げなまま、二人に振り向く節。

「じゃあ、なんでもなかったのかよ、お前ら。」

「ただの助け合いだけど？」

「あっそ。」

いつもの節ならホッとしたところでも、今なら何があってもテンションは上がらないのであった。

その放課後、節は心配になって聖奈の家によることにした。

しかし、昨日のことがあってか、流石に中に入る勇氣はなかった。

しばらくアパートの前でジッとしていると、そこに車が止まった。黒くて高級車に値するような高そうで立派なそれに乗った者は、逞真であった。

車から降りると、節を睨むように近寄った。

「何か用か？」

「聖奈は大丈夫なんだろうな！？」

「・・・何の話だ？」

「今日学校休んだことだよ！」

逞真は少し沈黙して考えた。

「ああ。確かに青白い顔をしていたが・・・学校を休んだのか。それはまずいな。」

「あんた・・・知らなかったのかよ。」

「まあな。体調を見る前に勤務時刻となった。」

「チ・・・」

節はどうしても逞真のことを許せそうになかった。直接節に関わったわけでもないが、昨日の聖奈の話を聞いてから、節の中での逞真の存在が一層悪くなったのだ。

二人はいつかのように睨み合った。

ガチャ

「・・・本当だ。寝てやがる。」

聖奈の部屋に入ると、そこには人というよりもベットの上に大きな塊があるようだった。

逞真は聖奈のベッドに腰を落とした。すると、毛布の山がゴソ・・・と動く。

「聖奈、さっき津田が来ていたぞ。」

「ええ・・・？」

聖奈は火照った顔を布団から覗かせた。

「お前をとて心配していた。」

「なんだよお・・・、インターホン押せば行ったのに。」

「お前、体調は大丈夫か？学校を休んだそうだな。」

そういうと、妹の額に手を当て、次に襟元を触った。

「けほけほっ。」

「・・・咳もしてるし熱っぽいな。鼻声だしリンパ管腫れてるし・・・昨日体拭いてなかっただろう。完璧な風邪だな。」

「けっほこほっ！咳出るし熱あるし鼻声なのもそうなんだけどお。」
「？」

逞真が小さく首を傾げると、聖奈は顔を赤くして声を張り上げた。

「私今日女の子の日なのっ！生理痛でお腹だるくてベッドから出られなくて・・・」

逞真は一瞬虚を衝かれた顔をしたが、不意に微笑んだ。

「そうか。それは失礼した。」

「ホントさ・・・」

「・・・よかった。」

「はい？なにがあ！？」

「津田とヘンなことしてなかったようだ。」

「ヘンなことってなにさ・・・」

「いや、別に。」

「なにさ、気になるじゃん！ヘンなことって??」

逞真は聖奈を目線から外して口を開いた。

「・・・昨日やってたこと以上のこと、だよ。」

「昨日・・・?」

「ああ。津田となにやらベタベタやってたなあ。」

聖奈はかあつと顔を赤くした。

「なっ、なんでそれを・・・!?」

「悪いが、拝見させてもらった。不審だったからな。」

「ばっ・・・バツカじゃないのっ!? 勝手に覗き見るなんて趣味が悪いのにも程があるってーのっ!!」

「それは済まない。お前のプライベートに首を突っ込む心算はなかったんだよ。」

「勘違いしないでよね? あれ、節ちゃんが勝手にやってきたことだからっ! 私は別にキスしたいなんて思ってたんだって!!」

「わかってるよ。だから安心したんだよ。聖奈はそんなヘンなことをする奴じゃないって。」

「・・・キス以上のこと、なんてねえ・・・」

「悪い。こんな話教師として持ち出すものではないな。だが、月経だって聞いたとしても妊娠していたら・・・なんて思う愚かな気持ちちが吹っ飛んだんだよ。」

「男なのにな、よくそんなに詳しく知ってるよね。」

逞真はフツと苦笑した。

「それでも4年間教師やって、中学生の女子の体調見てきてるんだ

が。」

「うわー・・・来たよ。こういうの。」

「・・・」

「・・・あのさ、こんな話題になっちゃったから訊くけどね？」

「なんだ」

「兄ちゃんはさ、誰かとキスしたことあるわけっ？」

沈黙が少し生まれる。

「・・・まあ、あるね。」

「へ、へえ！」

「何だよ、その不自然な驚き方は。」

「だって・・・意外だったんだもん。」

「そうだろうな。」

「ねえ、いついつ?？」

「言わないよ。」

「だらうねー・・・でも多分学生るときか。だったらさあ・・・」

「うん？」

「キスしたとき、またはされたとき・・・どんな思いだった？嬉しかった？辛かった？」

「辛い・・・という感情は無かった気がするな。」

「そういうもんだよね。うん。」

「聖奈」

聖奈はニカツと笑ったが、目は笑っていなかった。むしろ、辛くてどうしようもない感じだった。

「お前、初めてだったんだろう？」

「うん……。しかもそれが今まで友達だと思ってた男の子。ヤツは私のこと好きだって言ったよ。知ってるでしょ？それも……。でも、私は正直わかんないんだ。好きだって言われたらその気持ちに応えてあげるべきだけど、自分自身が同じ気持ちになれないと思うんだ、今は。だって、今までワイワイやってた自然な仲だったんだよ？はぁ……。」

「。。。。。」

「兄ちゃん、私、どうしたらいい。。。？」

聖奈が助けを求めるように声ですがると、逞真は真っ直ぐ聖奈を見詰めた。

「。。。。それは、お前自身が決めることだ。」

「。。。。そう、だね。」

「済まない。俺はそれくらいのことしか言えん。」

「いいよ。それが、一番の答えになったんだもん。」

「本当？」

「うん。」

逞真はスクツと立ち上がった。

「もう、行ってもいいか？」

「あ、うん。なんかゴメン。」

「いい。」

「ありがとつ。」

「お大事に。」

逞真は微かに微笑んで、ドアノブをひねった。

ボタン

聖奈が学校に復帰しても、その微妙な仲は途絶えたままだった。
気まずくて、今までのようにいかないのだ。

美和と賢明が頑張って二人をくっ付けようとしても駄目。琥珀石も渡せていないままだし、聖奈の心は滅茶苦茶であった。

「聖奈。節が会いたがってたぞ？」

賢明が聖奈のもとへやってきた。

「絶対違うっしょ。逢いたくねーって顔に書いてある。」

「馬鹿だなあ。アイツの性格、お前が一番わかってんじゃない。そーゆーの隠すほうじゃん？」

「・・・まあ。」

「何があったか知らねえけど、会ってやったらどうだ？」

「私のほうがそんな勇気ないよ！・・・あ、そうだ。」

聖奈はポケットから、節の琥珀石を出した。

「これ、節ちゃんのなんだ。渡しといてよ。」

賢明は首を振った。

「お前が渡せよ、聖奈。そのほうが二人にとってもいい。」

「どういう意味？」

「自分で考えろよっ！」

ガシガシと聖奈の頭を撫でた。

「？」

聖奈は混乱した頭で、賢明を見上げた。

一方節のほうには美和が助っ人に行っていた。

「節ー、なんで聖奈とこの頃亀裂起きてんのさ？」

「俺が知るかよ。あっちが会ってこないんだろー？」

「節、なんかしたの？」

節はムキになる。

「し、してねえよ！！」

「はぁ・・・凶星か。節って突っ走っちゃうからねえ・・・。」

「ほっとけよ。」

「ほっとくから、聖奈とこうなっちゃったんじゃないか。」

「・・・そうだけだよ・・・。」

「メールとかしてみれば？」

「そんな勇氣、俺にはねえよ。美和ちよつと聞いといてくれよ。なんで節と会わないの？とかさー。」

「自分ですればいいじゃんか。」

「はぁ・・・マジかよ・・・。」

節は舌打ちして、携帯のキーを押した。

「なんでそんな余所余所しいんだよ？俺のこと、嫌いか？」せ

その時点で、節は耐え切れなくなってその文章を消去した。

「駄目だ！俺にはできねえ・・・。」

節は恋愛小説とかでよく見る、ラブレターを書くのに苦勞して何

回も書き直す場面が浮かんだ。

（俺は、恋愛小説の主人公かよ……はっ、笑える。）

その絶望的な表情を、ただ美和は見守るしかできなかった。

「賢明、聖奈どうだった？」

放課後、二人だけの秘密基地で美和は木の上から賢明に話し掛ける。

「全然だめだ。節のことにすると、心閉ざしちゃってるみてえだ。」

「節もだよー。メールしたらって言ったら、そんな勇気ないって。」

「似た者同士だよなー、あの二人。」

「ホントさ。」

二人は溜息を吐いた。

「難しいねえ、関係をくつつけ直すって。」

第9話 離れゆく仲（後書き）

節と聖奈の仲があああ！！
どうすんでしょ、これから。。。。

次回もヨロシクです☆

第10話 友情の刹那（前書き）

暁 闘哉…20歳 あかつきとしいや 逞真の住んでいるアパートの住人。教育大学の2年生で夢は中学の国語の教師。逞真のことを駿河先輩と呼んでおり、聖奈は気の合う友達である。懐っこく、若々しい好青年。

寿 誠之助…52歳 いじじいぎさじょうのすけ 通称・ジョーさん。アパートの住人兼管理人。ノリのいいキャラでよく逞真をいじりたがる。時に頼れるおじさんパワーを発揮。住人を我が子のように思っている。

終 秋乃…26歳 ひいしゅうあきの 逞真の住んでいるアパートの住人。自称プロ少女漫画家。しかしペンネーム、漫画の題名ともに不明。突然現れ、そして音もなく帰っていく。逞真と同じ年で、彼からは秋乃ちゃんと呼ばれている。

西 孤太郎…30歳 にしこうたろう 逞真の住んでいるアパートの住人。通称・ニッシー。キツネ顔で嘘が得意。そのせいで妻と離婚した。一人息子を養っている。（息子・智史君）逞真のことは人生に成功した男と（勝手に）認め、羨ましがっている。

そう、逞真の住むアパートの住人は全て苗字が一文字なのである！
逞真だけ…（T|T）www

この話で初登場です☆では、ごゆっくりご覧くださいb

第10話 友情の刹那

「おはよー、聖奈！」

「おっはー！美和☆」

聖奈のテンションは元通りに戻っていた。

「今日宿題ないよねえ？」

「んー、多分。」

「えゝ、なにそれ。」

「だいじょぶ、だいじょぶあったとしても、賢明がいるでしょ、あたしらには。」

「あつ、そーだよね！！」

そう、他愛もない話をしながら、曲がり角を曲がると、途端に聖奈は美和の腕を掴んで逆方向へと駆け出した。

「へっ？せ、聖奈どうしたっ！？」

「いいから、黙ってついてくるのおっ！！」

50mくらい遠ざかると、聖奈は、息を切らしながら止まった。

「お、驚いたあゝ・・・」

「驚いたのはこっちだって！いきなりどうしたんだよ？」

「・・・節ちゃんがいた。」

「・・・・・・は」

「”は”だね、ホント！マジでゴメン／（＞|＜；）」

「いや・・・いんだけどさあ、まだ気にしてんだ。」

「急には戻らないよお。」

「何があつたんサ、君ら。まさか・・・告白う？」

「ングウ！？」

「アンタ・・・わかりやす・・・。」

聖奈は”ヘタこいたあゝ”と地面にへたり込んだ。

「告白、かあ。節がしたの？」

「・・・」

「いいじゃん。好きだって言われたんでしょ？」

「ん・・・」

「節じゃ駄目？ほかに好きな人がいるの？」

「そんなじゃないよ。ただ、友達だったから、理解不能なだけ！」

「そういうもんかねえ。」

「美和は、なんか思わないの？私と節ちゃんが付き合ったら、美和と賢明、二人だけになるんだよ？」

「平気だよ。それが二人の願いだったら。どうせ高校卒業したら離れるんだし、うちら。」

「そ、そんなこと言ったら、付き合うとかの話も水の泡になっちゃうじゃん。」

「違うよ。それは自分の中で思い出になる。この人と付き合ったの、いい思い出だったなあと思うんじゃない？ま、そうだったら、4人で友達だった時でもいい思い出だったなあって思うかもしれないけど。」

聖奈は押し黙る。

「ポジティブに考えれば、これでもいい思い出になるかも。」

聖奈は乾いた空を見上げた。秋に近づくその空を見ていると、それでさえ切なくなってしまうた。

授業が終わり、帰る時間となった。この時間が、聖奈の気まぜくなる時間帯だ。

急いで教室を出ないと節とでくわしてしまう。

素早く学校を出て、一人だけで歩くと、たくさんのことが頭に浮かんだ。

（最近、前みたいに遊んでないな。秘密基地にも行ってないし。コレという勉強もしてないし……。なんだろ私って。）

ふと足を止めた。

” いいじゃん。好きだって言われたんでしょ？ 節じゃ駄目？”

（駄目じゃないよ。もっと遠い関係だったら、OKしたよ、私は。ただ……。親しくなり過ぎちゃったみたい。）

聖奈は、節のことが頭に浮かびあがる。

『あー、あんときのアホな女？ 駿河ってんだ。いい名字だね。』

『何笑ってんだよ。ヘンな奴だなあ。』

『俺、短気じゃねえし!!』

『甘いものの何がわりいの??? 俺、菓子あれば一生生きられんだけど。神だな、アレ。』

『勝手にダチ殺すな!』

『あれあれ。カッパのヤロー。俺、凄くハマってるんだよね。』

『死にたいって思ってもさ、死ねなかったんだよ。受験するって決めたままだった弟だっているし、なによりお前や賢明や美和がいるよな。って。なんも関係ないのに急に俺が死んだってなったら、今の俺よりお前らはショックだろうと思って。だから、俺は生きるよ。』

(・・・もっ。普段私並みにバカだし単純だし、女のコ染みた性格だけど、でも真面目なこと偶に言って、私を助けてくれたりしたよね。)

急に心臓が脈打った。

(どうしたんだろ、私。なんでこんな気持ちになるの・・・?)

聖奈は自分の気持ちに気づくのが怖くて、家まで全速力で走った。

ボタン!

「はあ・・・はあ・・・」

聖奈は勢いよくドアを閉めた。

「なんなんだよお・・・」

部屋の中を見ると、机の上に、一枚の写真が置いてあった。聖奈はそれを掴み上げると、一気に涙目になった。

その写真。聖奈にとって思い出深い、秘密基地での4人の写真であった。最初で最後のデジカメで撮った写真。彼らは快樂な笑みを浮かべ、誰一人不満な顔はしていなかった。

「・・・っ」

急に聖奈はそれを見てムシャクシャした気持ちになり、写真を床に叩き付けたのだった。

パリー・・・ン

ガラスが割れ、写真にヒビが入る。最初は抵抗があったが、しばらく黙っていくうちに勢いと精神力に負け、聖奈は暴れ出した。

枕を振り回したり、棚の置物を落としまくったり、蹴ったり殴ったり・・・思えば部屋にあるもののほとんどが4人の思い出の品だったために余計に聖奈は癪癪気味になっていた。

・・・・・・・・・・

しばらくし、部屋は滅茶苦茶になった。足の踏み場もない。

聖奈は先ほどよりも落ち着いたようで、部屋の隅でうずくまっていた。

（どうして・・・こんな気持ちになんなきゃいけないんだろ・・・
？こんなの初めてだよ・・・）

聖奈は引つ切り無しに出てくる涙を必死に拭った。

（私って、素直じゃないよね。自分の気持ちを受け入れることができない。だから自分がホントは何考えてんのか、さっぱりわかんない・・・！節ちゃんのことは大好きだよ。でも・・・恋人になるってなったらまた違う気がする・・・。でも迷ってこんなことになるくらいなら、素直に付き合っちゃえばよかったのかなぁ・・・？）

聖奈はふと昔話していた会話を思い出した。

まだ高校1年生の時だ。美和がこんなことを言い出した。

『ねえ、節と聖奈の字をさあ、繋ぎ合わせたら面白いんだよ。』

3人は首を傾げていた。

『節と聖奈を合わせたら、”刹那^{せつな}”って言葉になるんだ。』

『せつ・・・な・・・あ、確かに。』

『ハッ、くっだらねー!』

『節ちゃん!!』

『だってよー、それが何だっただよ・・・ハハハWWW』

『そこまで笑うなよ!私がいじけたみたいじゃなか!』

『そうだぞ、笑い過ぎだ節。』

節はまだ腹を抱えていた。

『でも、刹那って言葉、カッコいいんじゃない？私は好きだなあ。』

『聖奈……』

『一瞬って意味なんでしょう？いいじゃん。』

『聖奈って、急に真面目なこと言い出すよな……。』

『ギャップ激しすぎじゃね？』

『ん？？そんなことないよぉー♪』

普段通りの会話。今にしては少し懐かしい感じがした。

（あの時は……私がボケて、美和がツッコんで、節ちゃんがバカにして賢明がそれを静めて……。楽しかったなあ……。やっぱり今まで通りのほうが、私には合ってる気がする。でも、あの時の節ちゃんの顔、本気だった……。）

聖奈は、顔を膝に埋めた。

（恋愛の小説とか漫画とか多いけど、どうして男女の付き合いって親しくなり過ぎると、今までの関係じゃなくなりそうになるんだろう……。ずっと友達同士でいられなくなっちゃうんだろう……。？本当に”刹那”だ。”友情の刹那”だ……。友情は一瞬にしか過ぎない。どうして？）

考えれば考えるほど空しくなっていくばかりで、聖奈は悲しかった。

聖奈は辺りが暗くなっても、そのままだった。

逞真がとっくの間に帰ってきてても。

「聖奈、飯だ。来い。」

逞真が扉ごしに声を掛ける。

「・・・・・・・・。」

「・・・聖奈？ いるんだよね？」

「・・・・・・・・。」

「返事くらいしろよ。入るぞ。」

ガチャ。

「グス……」

「……」

逞真は唾然とした。聖奈のピンで止めていない前髪はやたらと長くて、何より暗く闇にのまれていた。逞真は下手に触れて、聖奈の純粹な心が壊れてしまうんじゃないかと怖かった。

「はあ。神経図太い奴だと思ったら。」

「なにさっ。別に兄ちゃんにはカンケーないことじゃんっ!!」

「それは関係ないことかもしれないが……」

逞真は不意に床にあるトラ猫のぬいぐるみを手に取った。

「にゃー。」

と突きつけてきたため、聖奈はギョツとした。

「あの……どういう風の吹き回しで?」

「クスッ、やっといつもの聖奈じゃん。」

トラ猫を気に入ったかのように微笑して見詰める逞真。

「え……つとお……」

「例の連中も来ているから一緒に食べようかと思ったんだが、その顔じゃ無理そうだ。もし一緒に食べたかったら顔洗ってきなさい。あと、気が向けば部屋もきちんと片づけるんだぞ。」

そういうと、逞真は立ち上がり、部屋を出ていった。

「・・・なんなんだあ?？」

聖奈は逞真に差し出されたトラ猫を見た。

(あ・・・確かにちょっと元気出たかも。でも・・・どうしてだろう? 余計に涙が出てきちゃうよ・・・。)

と、温かいトラ猫を抱き締める。

(あの頃は、まだ、こんなじゃなくて、なんの苦労もなく楽しい日々だったのに・・・。)

不意に”にゃー”といった逞真の顔が浮かんた。

(先生って、ホント凄いな。どうしてこうも単純に子供を元気にさせてくれるんだろう?)

聖奈はフフツと苦笑した。

(バカヤロオ、私、自分で子供って認めてどうすんだよ・・・。)

「先パーイ！早く食べましょーよー！！！」

威勢のいい若者の声がする。それはリビングのテーブルから。

「つたく、お前の家じゃないんだぞ。」

「堅ってえコト言うなよー。その分家賃安くしてるんだしよお。ホラ、料理上手いの逞ちゃんだけやし。」

「ジョーさんまで……。俺ん家は食堂か。」

今の逞真の家には先ほど”例の連中”といっていた住人の2人、暁闘哉と寿誠之助が来ていた。

ピンポーン……

インターホンが鳴り、ドアを開ける。

「あ、逞真君。うちで肉じゃが余っちゃったんだけど食べなーい？んー？」

「あれエ！？ニッシーじゃん！ご無沙汰だことお。」

逞真が話す直前にジョーさんがヒョコツと顔を出してきた。

「ジョ、ジョーさん！つてことはあれかい？闘哉君も……」

「こーんちわ☆」

「はあ、他にニッシーみたいな優しい人はいないんですかね。」

逞真は溜息を吐いて肉じゃがの入ったタッパを受け取る。

「あ、大丈夫大丈夫。僕も子守終えて一息つこうと考えてたからb」
「イジメだ・・・これはイジメでしょ、絶対。」

「あれ？聖奈ちゃんは？」

「・・・今取り込み中です。」

沈黙の中、鬨哉だけニヤけた。

ガチャ

聖奈が部屋から出てきた。一旦こちらを向き、フイツと洗面台に行ってしまった。髪はきちんと整っている。

「どしたんじゃ、アレ。」

「失恋ですよ、失恋。」

「なんと！」

「暁。」

「駿河先輩も気づいてたんでしょ？」

「・・・・・・」

「凶星か。流石人生に成功した男だ。うん。」

「でも、意外だなあ。あの聖奈ちゃんが。」

米を頬張り、目を伏せる逞真。

「まあ高校生だし、それは恋だってするでしょうよ。」

「そして甘酸っぱくてホロ苦い想いもする。」

気が付けば、小テーブルには秋乃が漫画セット一式持って座っていた。

「・・・秋乃ちゃん、君、いつの間に居たの？」

「いまさっきよ。ここいいネタ浮かぶわけね。あ、さっきの言葉い
ただくわ♪」

「お、おい。聖奈を参考人物にするつもりか？」

「台詞もらうだけよ。世の中、日常も取り入れなきゃやってけない
もん！」

「ああ・・・そう。」

その時、聖奈がガタンと自分の席に腰かけた。フツ切れたかのよ
うな表情でニカッと笑う。

「ちよおっと！おい、逞真！私の分はまだな訳！？」

「逞真と呼ぶな、馬鹿野郎。」

「んまッ、教師が子供に馬鹿っていったぁー！」

「やかましい・・・」

逞真はしぶしぶ聖奈の分の食事を温め直す。

住人たちはうんうん頷いた。

（これでこそ聖奈ちゃんだ。うん。）

「おかわりっ！！」

今晚の聖奈の食べる量といったらハンパなかった。

「お前・・・太るぞ。」

「ほっとけい！今日はハラ減ったのっ！バンバン食べるんだから。」

「それがいいぞ、聖奈ちゃん。まだまだ成長期☆」

「そっスよ！俺だって力つけてるしー。」

聖奈は闘哉とジョーさんとハイタッチした。

ニッシーは満足気に微笑み、逞真も安心したように聖奈を見詰めた。

「んーいいわねえ・・・今の聖奈ちゃんの表情、主人公に使えそうだわッ！」

「やった☆」

普通通りの駿河家のディナー(?)に戻って、一気に雰囲気明るくなった。

その夜中のこと。

逞真はぐつぐつと眠りこんだ聖奈の部屋に入った。部屋はさつきとは比べ物にならないくらい片付いていた。

妹の無邪気な寝顔に微笑んで、深刻な顔をベッドの隣の小さな棚に向ける。そこには電気と本と、携帯が置いてあった。

逞真は携帯を静かに手に取る。そして、物音を立てないように部屋を出た。

携帯をいじり、節の携帯アドレスを見つけ出す。逞真はその発声通信ボタンを押し、耳に傾けた。

へもしもし、聖奈！？

案の定節の驚愕した声が返ってきた。

「……の、兄だ。」

一気に節のテンションが下がっていた。

へこれ……聖奈のだよな……ですよね？

「そうだ。」

「・・・何の用・・・ですか？」

逞真は冷酷な声で言い放った。

「明日、土曜日の午後4時、北公園に来い。」

「・・・は。」

「必ず来い。わかったな？」

「え・・・あ・・・はあ・・・。」

曖昧なまま電話を切った。

その逞真の表情は、無に近く、また、怒りもこもっていた。

第10話 友情の刹那（後書き）

逞真お兄ちゃん、一体何するつもりなんでしょうかねえ・・・

次回も宜しく願います☆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9922v/>

友情の刹那

2011年11月13日14時44分発行